
ONE PIECE ワンピース ～流れる者～

アクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ワンピース ～流れる者～

【Nコード】

N7729N

【作者名】

アクセル

【あらすじ】

海賊王の見習いクルーがもう一人いると言う設定です。オリジナルの実や他の作品のキャラや技ともです。原作にもそれなりに介入していきますので、かなりご都合主義になっています。不定期更新にもなりますので、そういうのがお嫌いな方はご遠慮ください。

プロローグ（前書き）

気まぐれで書いてます。・・・ほとんど素人ですので、読む方はご覚悟ください。

ブローグ

ここは東の海イーストブルーにある平和の象徴たる街、ローグタウン。今ここで海賊王が処刑されようとしている……

「俺の財宝か……欲しけりやくれてやる……探せえ!!!」
「この世の全てをそこに置いてきた……。」

その瞬間その場に居合わせた全ての人々が歓声を上げた。

「『うおおおおおおお』—————
っ!!!!!!!!!!」

叫び騒ぐ民衆の中には数々の名だたる海賊たちがいて、船長の最後を静かに見届けた海賊王の見習いクルー達がいた。……シャックスにバギー……そして、二人の真ん中に立つ銀髪に金色の目をした少年……。

「船長……あんたの最後カッコよかったぜ……。」

……処刑が終わった後、道の真ん中で騒ぐ三人。

「俺と一緒に来いよ二人とも。」

「オメーの部下なんざ、まっぴらだバアーカ!!」

「俺も遠慮しておく。」

シャンクスの誘いを断る少年。

「俺は世界を見てくるよ・・・船長が開いた新しい世界がどう流れるかを・・・。」

静かに海の方角を見つめる少年。

「でも、一人で大丈夫なのか？お前、まだ十三歳だろ。」

「心配するなシャンクス。俺は船長やレイリーさんに嫌と言っほど鍛えられたんだ・・・それに、このアホみたいなヘマはしない。」

と、ゆびを指されるバギー。

「誰がアホだてめえっ!!それが先輩に対する口の聞き方かあッ!」

「そうかあ？船長やレイリーさんと同じ口の聞き方だぞ。」

「お前は、もう少し目上の人間を労れっ!!」

「まあまあ、バギー。」

怒るバギーをシャンクスがなだめる。

「じゃあな、二人とも。縁があつたらまた会おう」

「バアーカ、てめえなんかさっさとどこかに行っちまえ。」

と、後ろを向くバギーはどこか寂しそう・・・。

「ああ、お前の無事を祈ってるぜ、リュウ。」

と、笑顔で友を見送るシャンクス・・・。

「さてと・・・世界はどう流れるかな?・・・」

二人に別れを告げて海に出る少年・・・この数年後、彼の名は世界に轟いていた。

「（流離^{なすらい}のリュウ）、懸賞金5億ベリ。」

プロローグ（後書き）

気まぐれで書いているので、クレームとつは受け付けません。

第1話（前書き）

シャunks、バギーと別れてから2年後になります。

第1話

ここはグランドラインにある島ジャヤ。そして島の西にある町、夢を見ぬ者が集まる、嘲りの町モックタウン。そこにある酒屋のなかに、銀髪で丸いサングラスをかけた少年がいた。

「ぶはあゝ、やはりミルクは喉をうるおす」

ミルクの入ったコップをテーブルに置き、今朝買った新聞を読み始める少年。

「えゝと、（西の海オハラ島）に、バスターコール？」

記事のトップを飾っているオハラ的事件に眼がいく少年。さらに読み進めていく。

「（世界政府にたて突くテロリストが数多く潜伏するオハラに政府は、バスターコールを発令。島もろ共、テロリストを一網打尽にする。なお、オハラから一人のテロリストが逃走、政府はその行方を追っている。）・・・愚かな。」

記事の内容に呆れる少年。

「オハラか・・・あの島の学者は（歴史の本文）の解説をしていると言うからなあ・・・それで政府に目を付けられたか・・・それにしても、この逃走したテロリスト・・・。」

記事に挟んであった手配書。（オハラの悪魔、ニコ・ロビン）懸賞金7千9百万ベリ！。それを見た少年は。

「わずか8歳の少女に、この懸賞金の額はおかしい。・・・おそらく、この少女も（歴史の本文）を読めるんだろうな。」

と、テーブルの上にあるミルクを飲んだその時。

『ドバアッ！！』

勢いよく店のドアが開かれたその先には、全身に銃火器を身に付けた3メートルはある大柄でひげ面の男と、その後ろに腰に銃、背中にライフル銃を背負った数人の男たちがいた。

「ぐうほほほほ・・・おい、マスター。酒と食事を人数分、用意しろお。」

不気味に笑う声でマスターに命令する男。ズシズシとカウンター

に歩いて行くその姿を見た周りの者たちは。

「おいっ！あの男は、ま、まさか。」

「ああ、間違いねえ。あの全身に身に付けた銃火器……。あいっは（百銃のストロング）だっ！」

「あ、あいつが……。あの懸賞金7千5百万ベリーの……。。」

（百銃のストロング）、懸賞金7千5百万ベリーの男。それを見た周りの男どもは、慌てて席を立ち、譲ろうとする。

「おっ！気が利くじゃねえか、わりいな。ぐうほほほ……。。」

礼を言うストロング。ここにいるほとんどの者は弱者を痛ぶることしかできず、逆らおうとはしないが、中には気合いだけは、一人前の者もいる。

「おおいつ！、あんまし調子に乗ってんじゃねえぞ」

と、勢いよく声を張り上げた、ストロングと同じくらい大柄で筋肉質の男。

「ぐうほ？、何だキサマは？」

「俺のささやかな昼食タイムに水を刺すんじゃないやねえ。」

と、啖呵をきり、ストロングの前に立つ男を見た周りの者は、また騒ぎだした。

「おいっ！、あいつは確か・・・」

「ああ、あのでかい体に、ぶつとい腕・・・」(剛腕のベル)懸賞金6千2百万ベリー」だっ！」

「あの、腕だけで数々の敵を吹き飛ばすという。」

高額の賞金首がまた現れたことで騒ぎだす連中を尻目ににらみ合う二人。

「わしにたてつくとは、いい度胸をしてるなあ。ぐうほほほほ・・・」

「だまれ、どうせ銃がなければ何もできないだろあ！」

「汚ねえ肉腕ぶら下げて、よく吠えるなあ」

「て、てめえっ！！」

自慢の腕を侮辱されて、頭に血がのぼり腕や首に青筋が浮き出るベル。

「くたばりやがれえっ!!クソ野郎っ!!」

その自慢の腕でパンチを繰り出すベルであったが、

『バシッ!!!』

「ぐうっ、うっ!」

「その程度かあ?ぐうほほほほ・・・『グギッ!!!』」

「ぐぎゃあああああああっ!!!」

ベルのパンチを片手で受け止めたストロングはそのまま腕をへし折る。

「がつ、ぐあっ、う、腕があっ!!!」

「ぐおほほほ、腕が折れただけでこのザマとはなさけねえ・・・
『ガシッ!!!』」

「ぐぐうっ!?!」

激痛で倒れこむベルの首をつかみ、持ち上げるストロング。

「じゃあ次はわしの番だな。」

大きな銃口の銃をベルの腹に突きつける。

「ま、まってくれっ!!俺の負けっ、」

「吹き飛ばえ『カチッ』」

『バウアンッ!!!』

『ドウオウッ!!!————ドドドッ!!!————!!!』

そのままベルはドアを突き破り、さらに向かいの家の壁も突き破った。

「ぐうほほほ……よく吹き飛んだあ!」

高らかと笑うストロングを見た周りの者たちは、

「う、嘘だろっ！あの（剛腕のベル）がたった一撃でっ！」

「やばいぜ、あいつはっ！……さっさとづらかろっぜ！」

『ダダダダダッ！』

この惨劇を見た連中は早々に店から出て行って、店の中にはマスターとストロングとその一味だけが残った。

「ぐうほほほ……店が広くなったあ。ぐうほほほ……」

さらに高らかと笑うストロングであったが、

『コトッ』

「ぐうほほほ……ぐうほ？」

音のする方角を見ると、

「ええーと、世界情勢はあー」

そこには、今までの惨劇を全く気にも止めず、新聞を読みミルクを飲む少年がいた……

第1話（後書き）

主人公を戦わせるつもりだったのですが、前フリが長くなってしまったので、主人公の戦いは次回にします。

第2話（前書き）

前回の続きです。

第2話

百銃のストロングが見つめるその先には、新聞を読みながらミルクを飲む、銀髪で丸いサングラスをかけた少年がいた。

「ええ、明日の天気は」

これまでの惨劇を気にも止めず、新聞を読み進める少年にストロングは……

「ぐうほほほほ……わしの戦いを見て全くどうじねえとは、中々肝っ玉が据わってるじゃねえかあ小僧お。」

高らかと笑いながら話しかけてくるストロングであったが、少年は振り向きもしない。

「おいっ！キサマ。船長が話しかけているのに何だその態度はっ！」

と、部下の一人が少年に問い詰める。

「ぐうほほほほっ、たいしたもんだ。だが、わしに対してそんな

態度をとってタダですむとは、思ってたんじゃないだろうなあ？」

殺気を放ち、少年を威嚇するストロング。後ろの部下共がニヤニヤしながら見ている中、少年は振り向かずに、静かに口だけを動かした。

「やかましい。無視しようと必死に努力する俺の姿が目に入らんのか、アホが。」

特に表情もなく、ぶっきらぼう相手を侮辱する少年。

「キサマっ！！船長に向かって何ということをおっ！！」

「ぐうほほほ！！、たいした度胸だぁ・・・だがなぁ」『ガシャッ』『！？』

『ボオンッ！！』『ドバーンッ！！』

素早く発砲したストロング。少年のいた場所は壁ごと無くなっていた。

「ぐうほほほっ！綺麗サッパリ吹き飛んだぁ！ぐうほほほほ・・・」

高らかに笑いだすストロングであった……だが、

「マスター、ミルクのおかわりを。」

「ぐうほっ!？」

と、声のする方角に振り向く一同。そこにはさっきと全く変わらない体制で新聞を読む少年の姿があった。

「ど、どうしてっ!？」

「何時の間につ!？」

部下達が動揺する中、さすがのストロングもこれには動揺していた。あの体制では回避不可能の攻撃だったはずなのに。

「おいっきさまぁ!。どうやってわしの攻撃をかわしたぁ!？」

「マスター。早くおかわりを頼む。」

ストロングの問いを無視する少年はマスターにおかわりをさいそくするが、当のマスターはさっきのやり取りですっかり怯えてしまい、隠れてしまっている。

「仕方がない、楽しみに取っておいた持参のミルクを飲むかあ」

少年は先日、評判の店で買った限定、高級ミルクを取り出すが、それを見た瞬間・・・

「キサマあ、何時までわしを無視する」のうあああああああ
ああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！「きつ！？」

突然、大声で叫び出す少年に驚く一同。一体何が起きたのかと思
った瞬間、少年が口を開く。

「このミルクっ・・・このミルクっ・・・」

一同の頭に（？）マークが浮かんだ、その瞬間っ！

「ヨーグルトソースだったあ。」

「」「」「どてえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」「」「」

険しい顔で少年が言った瞬間、その場にいた（マスターも含む）
全員がズッコケた。

「なんというう!!、しかもジュースではなくソースっ!!。何故!?!、何故だ!?!?。」

「キサマあつ!!、ふざけるのもいいかげんにしろうつ!!」

と、怒り叫ぶストロングであったが、それを無視してミルクもといソースのことを悔いている少年。

「俺は、俺は何て愚かなことをお!!」

さすがに、この態度でストロングの怒りは頂点に達した。

「もう、勘弁ならねえっ!!。コナゴナに吹き飛ばしてやるうつ!!」

怒り狂うストロングは大型銃を構えようとするが、それよりも先に少年がストロングの目の前に立つ。

「なっ!?!」

突然目の前に現れ驚くストロングに少年は額に手をかざした。

「人が後悔と言う苦痛を味わっている最中に追い打ちをかけるんじゃない……」

静かに少年が語る間、中指を折り曲げ、

「なあーーーーーいつ!?!」

と、叫んだ瞬間、中指を勢いよく繰り出す。

「ぐうおあつ!?!」

『ドオオーーーーッ!、ドドドドッ!、ドドドオーーーー
ーンッ!?!』

少年の放ったデコピンをくらったストロングは、店の天井と屋根を突き抜け、空高ーーーーく飛んで行った。……それを見た部下達はというと。

「せ、船長おーっ!?!」

「船長が飛んでいったあ!?!」

「待ってくださあい、船長っ!?!」

慌てて飛んで行ったストロングを追いかける部下達。．．．店に大きな穴が空き、スツカリ静かになった．．．。

「俺は、まだまだ未熟者だなあ．．．もっと誠心をしなればあつ!．．．。」

気持ちを切り替えて、店を出ようとした瞬間。

「ま、まってくれえっ!」

「?っ」

突然、店のマスターにひき止められる少年。

「お前さんは一体．．．何者．．．。」

マスターに素性を聞かれる少年は静かに口を開く。

「俺の名は、リュウ．．．。」

と、名乗った瞬間、サングラスを取る。

「さすらいびと
流離人だ。」

そう言い残し、店を後にする少年。・・・ただ一人残ったマスターは、

「リュウ、・・・流離、・・・それにあの金色の眼は・・・ま、まさかつ！」

マスターは慌てて店の奥に行き、しまっておいた手配書を調べる、・・・そして、一つの手配書に目が止まった。

「やっぱいい」

（さすらい流離のリュウ）懸賞金2億ベリ・・・。

第2話（後書き）

今はまだ、主人公の懸賞金は2億の設定です。これから話を進めてく内に額を上げていきます。・・・それから今回も主人公は戦いはしてないので、申し訳ありませんっ！。次こそは戦わせたいと思います。

第3話（前書き）

前回から、また続きです。今度こそ主人公を戦わせます。主人公の能力も明らかになると思います。

第3話

酒屋を後にした少年は、泊っていた宿に戻り、一夜を明かした。

「んっ、んんんー！」

大きく背を伸ばし、顔を洗い、昨日の帰りに買っておいたミルクを用意する。

「ゴク、ゴク、ゴク、ゴク……」

ミルクを手に取り、一気に飲み干す。

「ぷはぁ〜、やはりミルクが一番。……でもこのミルク、あまり美味くなかったなあ。」

そう言っ、リュウはズボンを履き上着を手に取り、宿をでる。町中を歩いていると、町にたむろする連中が、歩いてくるリュウの姿を見てコソコソと話出す。

「おいっ、あいつはあ。」

「ああ、確かにそうだあ。」

「あいつが、指一本で百銃のストロングをふき飛ばしたって言う・
・・・」

昨日の酒屋でのやりとりを隠れて見ていた連中が話こんでいた。
ストロングを倒した？、もとい吹き飛ばしたことで、リュウは町全
体でスツカリ噂になっていた。

「一体、何者なんだあ！？」

「て、言つかどうやってデコピンであんなにふき飛ばせるんだあ
！？」

リュウのことで、疑問視しながらコソコソと話し込む町の連中を
見たリュウは。

「（全く、見れば見るほど興味が持てなさそうな連中ばかりだ。
・
・
・そろそろ、この島を出るかあ。）
・
・
・ふう〜。」

町の連中を見てため息を出すリュウは、軽く買い物をすませたあ
と、船を停泊させていた港え向かった。

「おう、ここだ、ここだ。」

足を止めたリュウのその先に中型の船（一人でも航行可能な船）が、あった。

「食料よし。衣服、雑貨よし。．．．そして、ミルク百本
よおし。」

買った品を確認するリュウ。出向準備を整えて、いざ出向しようとしたその時。

『ガシンッ！』『ガシンッ！』

突然大きな鈍い音がして、リュウは外に出た。そこには、鎖の繋がったアンカーが、リュウの船を囲むように打ちこまれ、そしてその先には、大型の海賊船がいた。

「ぐうほほほほっ！！もう、逃げられねえぜ。」

後ろから高らかに不気味な笑い声がし、振り向くとそこには、頭に包帯を巻いたストロングが大勢の部下を連れて居た。

「また、お前かあ。」

「わしにあれだけのことをして、タダで済むと思うんじゃねえぞ。」

ストロングがそう言うと同時に、船に乗った連中も合わせて百人を超える部下達が、一斉に銃を構えた。

「ぐうほほほ！、こいつらが持っている銃は連射型の機関銃だあ！。さすがにこれだけの数で撃たれば、逃げられねえだろう！。泣いて謝るなら、もっと楽に死なせてやるぜえ！？」

高らかと笑いうストロング。・・・しかし、リュウは

「汚い笑い声でしゃべるな。それになんだ？、その汚い包帯の巻き方は？・・・これだけ部下が居ながら、まともに包帯を巻ける船医もいないのか？。」

挟み撃ちにされている状況でありながら、これっぽっちも動揺せず、相手を侮辱するリュウ。そのやり取りを、遠くから見ていた連中が。

「あいつバカかあ！」

「あそこまで追い込まれているのに何かんがえてんだあ！？」

ているが、しかしその中に人影があつた。

「7961発、・・・無駄にしたな。」

「!!!?」

そこには、全く無傷のリュウが立っていた。そしてその横には、さきほど部下達が発砲した弾丸が、山のように積まれていた。

「えっ!？」

「な、な何故っ!？」

「ど、ど、どどうなってるんだっ!？」

目の前で起こっている、まか不思議な出来事にその場にいる者たちは激しく動揺している。

「く、く、ひ怯むなあっ!!!。もい一度か「クロックアップ」」

ストロングが命令を下している最中にリュウは行動を起こしていた。リュウの姿が一瞬にして消え

『ガシッ!』『ズカツ!』『バシッ!』『グスッ!』

「構えて、・・・撃・・・・て・・・・っ!!?」

ストロングがしゃべり終わる頃には、すでに部下全員（船に乗っていた者も）が倒れていた。それを、遠くから眺めていた連中は

「おいっ!!全員倒れてるぞ、」

「何が起きたんだっ!?!」

突然の出来事に全く訳がわからず、騒いでいる野次馬達。これにはストロングも啞然としている。

「な、な、な、なっ!!?!」

「心配するな。全員、生かしてある。・・・・さっさと連れて帰れ、そうすれば命までは捕らない。」

「なっ!?!なにをお!!!」

リュウの言葉に腹を立てるストロング。

「このままでおわれるかあっ!!!!!」

と、叫ぶストロングは、背中に背負っていた沢山の大型銃を素早く組み立てた。そしてそこには、自分の背丈よりもデカい超大型の重機関銃（バルカン砲）があった。

「ぐうほほほほっ！！、どうだあっ！！。これは、毎分6000発の発射速度を誇るバルカン砲だあ！！。・・・さすがにこれにくらえば、ひとたまりもねえだろお！！。」

自信満々に叫ぶストロングであつたが

「やめておけ。今それを撃てば、倒れているお前の手下達も巻き込むぞ。」

「そんなもん、知るかあつ!!!」

「
・
・
・
愚かなあ。
」

その瞬間リュウは高く跳びあがる。そしてそれを追い、バルカン砲を撃つストロング。

『~~~~~』~~~~~

撃った弾丸は全て着弾するが、しかしリュウの体はキズつくことなく、全てすり抜けていた。

「!!?っ」

それに気づいたストロングは慌てて発砲をやめる。そして、着地したリュウは静かに指を天に指した。

「死んだ俺の船長は言っていた。……船長が一番なさねばならないこと……。それは、仲間の命を守ること、だと。」

腕を下げ、サングラスを外すリュウ。

「お前は、仲間を持つ資格がないっ!!」

凄まじい殺気を放ち、相手を睨みつけるリュウ。それを見たストロングは

「銀髪に、……その金色の眼……。ま、ま、まさかっ!!?」

「従って俺はお前を倒す。……「クロックアップ」」

そして、リュウは一瞬にして、ストロングを吹き飛ばす。

『バシッ！！』

「ぐうあっ！！」

一瞬にしてふき飛ばされるストロング。だが、ふき飛ば先にリュウは、また一瞬にして周り込み、ストロングをふき飛ばす。

『ガシッ！！』

「ぐうおっ！！」

リュウは相手を空中に高あーく跳ね上げて、超高速で攻撃を繰り返す。・・・その光景は、まるで人が何も無い空中に縛られて、空気に殴られているような光景である。

『ガッ！！』 『スカッ！！』 『ガシッ！！』 『スカッ！！』 『バシッ！！』

そしてリュウはストロングの真上に現れ、飛び蹴りの体制をとる。

「くらえっ」

「!!!??っ」

『バシッ!!!!』

『ドオゴオーーーーーッ!!!!!!!』

リュウは超高速で飛び蹴りをくり出し、それをくらったストロングは物凄い勢いで地面に叩きつけられた。・・・そして、叩きつけられたストロングの後には大きなクレーターが、出来ていた。

「ふう〜〜・・・愚か者を倒しても、気は晴れんなあ。」

リュウは服に付いたホコリをはたき、サングラスをかける。そして船に乗り込み、出航しようとするが、船の前方には、さっき倒したストロングの海賊船があることを思い出した。

「・・・この船、邪魔だなあ・・・よし!。」

リュウは両手を何かを包むように合わせる。そして、手の中で奇妙な塊が現れ

「ハアーーーーっ!!!!」

『ドオッガアー————ツ!!!!!!!!!!』

それを前方の船に向かって撃った瞬間、船はコナゴナふき飛び、乗っていた連中は海に落ちていった

『パラ、パラ、パラ、パラ……』

「よお——し。これで船が出せる。」

そしてリュウは、今度こそ船を出航させ、島を出た。………それを見ていた周りの連中はと言うと。

「な、な、何なんだあつ!!あれはあつ!!!」

「い、一体何者つ「流離なすりのリュウ」、!?!」

騒いでいる連中が声がした方を向くと、そこには昨日リュウがいた酒屋のマスターがいた。そしてマスターは一枚の手配書をかざす。

「あいつは、懸賞金2億ベリ……流離なすりのリュウだあつ!!!」

「あ、あいつがつ!あの……流離の………」

。。
手配書を見た連中は、すでに遠くにいるリュウを見つめる……

「ふうはあゝ……戦いの後のミルクはうまい。」

買っておいたミルクを飲み干すリュウ

「……それにしても。」

リュウは自分の手を見つめたその瞬間、手は突然、無数の（肉眼で確認するのがやっとの）粒状になった。

「この能力は本当に使えるなあ……」

（リュウリュウの実）モデル、粒子^{りゅうし}

第3話（後書き）

主人公を戦わせ、能力も出しました。（仮面ライダーカブトのネタを使っています。）・・・能力紹介は、今後あらためて書きま
す。

主人公紹介（設定は今後増えていきます。）（前書き）

あるストーリーが思いついたので、主人公の設定を少し変更させてもらいます。

主人公紹介（設定は今後増えていきます。）

「主人公」リュウ

「特徴」

銀髪に金色の眼。とく目立つ金色の眼は普段、丸いサングラスで隠している。

「服装」

黒いYシャツに白いズボン。白い長袖の上着をきていて、指穴があるハンドグローブを付けている。

元、海賊王ゴールド・ロジャーの、見習いクルーでシャンクスとバギーの後輩。五歳の頃に、悪魔の実を食べたことで、親に化物あつかいにされて棄てられ路頭に迷っていたところを、ロジャーに拾われ見習いクルーになった。基本、誰に対しても同じ態度をとる（人をさん付けで呼ぶことは、ある）が、それに関してバギーによく責められていた。大のミルク好きで、船にはミルクをタンクで貯蔵している。

「能力」

リュウリュウの実（モデル、りゅうし粒子）りゅうし粒子人間

体を粒子にすることができ、能力を最大にすれば大気中に存在する微粒子をあやつることもできる。

「技」

クロックアップ

超高速の特殊移動方法。体内に存在する粒子を操作し、光と同じ速度で動ける。瞬間的になら光をこえることも可能。ただし、一度に長時間使くと、体への負担が大きいため、連続回数で使う。（注意、仮面ライダーカブトの技です。）

クロックダウン

大気中存在する微粒子を使って時間流を操り、周りの時間を遅らせることができる。クロックアップよりも遥かに体力を消耗するため、滅多に使わない。

粒子弾

大気中存在する微粒子をボール状に集め放出する技。対象を粉碎

することに長けているため、生物相手にはあまり使用しない。威力によって撃つまでの時間が長くなる。

バーティクルロード 粒子の道

粒子で道を作る技で、形は自由に出来るため、相手の技を跳ね返すこともできる。

（本編で書いた設定を改善しました。これが、この技の設定になります。）

粒子拳

拳の形をした粒子を拳から繰り出す技。対象を吹き飛ばすことに長けているため、戦いではよく使用する。

粒子激

腕にクロックアップを集中させ、超高速でパンチを繰り出す。普通にクロックアップを発動させた時のパンチよりも早く、そのスピードは光を超える。

粒子拳・流星群

粒子拳を無数に繰り出す技。多対一の時によく使用する。（幽々白書の主人公が使用するショットガンみたいな物です。）

（技は、今後増えていきます。）

覇^は気^き

覇王色は持っていません。

以上です。

主人公紹介（設定は今後増えていきます。）（後書き）

これは、今の段階の設定なので今後増えていきます。

第4話（前書き）

前回の話から4年経過しています。今回のストーリーも、一話完結はしません。

第4話

グランドラインのとある海の上で、二つの船が対峙していた。一つは海軍旗と中将座乗旗を掲げた、海軍艦。……もう一方は軍艦より遥かに小さい中型サイズの船。……そしてその上には、少年から青年えと成長したリュウの姿があつた。

「……中将座乗の軍艦が、何故こんな所に？」

「流離^{さすらい}のリュウは、いるかつ!!。」

突然、大声で呼ばれたリュウはその方向に振り向くと、そこには正義のコートを着た大柄な男が立っていた。

「私は、海軍本部中将のミミズクだつ!!。貴殿に話があつて来た!!。」

「ふう〜ん……。」「

リュウは、目の前に中将と800人を超える海兵が乗っている軍艦を前にして、全く平然としていた。

「……それで、何のようだ?。生憎だが、これだけの人数を持て成すほどの、ミルクは用意してないぞ。」「

「冗談交じりで、言葉を返すリュウだが、相手は気にせず話しを進める。」

「貴殿に、王下七武海への加入を勧めにきた。！」

「王下七武海！？」

これには、さすがのリュウも少し驚いた。

「何故、俺なんだ？。俺よりも懸賞金が上の奴は、他にたくさん要るだろお。」

「貴殿は自然系ロギアの能力者であり、その能力は使い方次第では、海軍大将ともわたり合うこともできる。」

「ほおー。それは、それは、ずいぶん高く評価されているんだなあ。」

リュウは、海軍が自分に対して、ずいぶん高く評価していることに、驚いている。

「それに、人格に対しても問題なしと政府からも判断され、こうして加入を勧めにはせ参じた。」

「うれしい評価だなぁ・・・・・・・・だが、断るっ！」

「!？」

キツパリと断るリュウ。ミミズク中將は、加入拒否の理由をたずねる。

「何故に!？」

「七武海に入ると言うことは、政府の犬になれと言うこと・・・・・・・・つまり、政府の命令を聞けと言うことになる。・・・・・・・・ハツキリ、言うておこー!。」

リュウはサングラスを外し、指を天に指す。

「俺に命令できるのは、今は亡き船長だけだぁ!!」

揺るぎない声でリュウは、そう断言する。

「分かったら、さっさと帰れ。・・・・・・・・何者にも、俺の流れを妨げることはさせない。」

そう言つて、リュウは相手に退却を言い渡すが、

「なるほど、理由は理解した……だが、このまま引き下がるわけにはいかない!!」

「何っ!?!」

「貴殿は、味方に居れば頼もしい存在であるが、敵に回れば……この上ない脅威にも成りえるっ!!。故に、このまま放置することはできない。」

「愚かな。」

そう言つてゐる間に、海兵達は戦闘態勢に入る。そして、先だつた中将はリュウに向かって、六式の一つ、嵐脚ランキヤクを繰り出した。

「ふんっ!!」

「あまいつ!!」『バシンッ!!!!』

繰り出された嵐脚ランキヤクをリュウは、手刀によつてはじき飛ばす。

『ザア————ン!!!!!!!!!!』

はじき飛ばされた嵐脚ランキョクは海に落ち、巨大な水しぶきが上がった。

「ほー、これは大した威力だなあ。さすが海軍中将と言ったところかあ。・・・悪いが、俺は無駄な戦いは好きじゃないんだ。・・・さつさと終わらせてやるっ!!」

目つきが変わったリュウは、腕を構え大気中の粒子をかき集めた。それを見た中将を含む海兵達は皆、厳戒態勢となる。・・・そして、

「はあーっ!!!!」

『ブウォアーーーーー!!!!!!』

放たれた粒子によって、海兵達に巨大な衝撃が襲い、軍艦が大きく揺れる。

「のあっ!!」

「「うあーっ!!」」

「うろたえるなあっ!!。被害状況を確認しろ!!」

唯一、冷静さを保っていたミミズク中将は、慌てる部下達に激をとばし状況を確認させる。

「あつ、ハイっ!!。我が艦の状況は、．．．え、えっ!?!?．．．
．．．ど、ど、どこも．．被害は．．．受けてま．．．せ．．
．せん!?!?．．．。」

「何っ!?!?．．．!!っ、奴は!?!?」

中將が振り向くと、そこにリュウの姿はなく、船ごとなくなっていた。それに気づいた海兵達は慌てて辺りを見渡し、ある一方の方向に目をやると、

『ビューーーーーーー!!!!!!!!!!』

「こんな無駄な戦い、してられるかあーーーー!!!!!!!!!!」

リュウは、集めた粒子を軍艦ではなく自分の船の帆に放ち、離脱をしていた。それを見た海兵達はと言うと、

「『『『『逃げられたあ』『』『』．．．．．。』

あそこまでやる気満々な態度を取られていた為、相手が逃げるとは中將も含めて誰も思わなかったのであり、だんだん遠ざかっていくリュウの船を、ジッと見つめている．．．．．。

．．．．．一方、まんまと逃げだしたリュウは、

「ふう〜〜！、随分進んだなあ〜。よし、この辺でミルクを一杯．．．．．んっ？」

リュウが、ふ、と見た方角には一つの船を囲む三つの船があった。リュウは荷から望遠鏡を取り出し、確認する。

「（囲まれている船は客船のようだなあ。囲む三つの船はあ．．．．海賊船ではないな。でも、客船を襲っているみたいだが．．．．．）、行ってみるか。」

リュウは気付かれないように船を進め、近づいていく。そして、船を客船の後ろに泊め、客船に飛び乗った。そして甲板の上に行く

「なんだあ、これは!？」

そこには、

「」「うあー!!」「」

「や、やめてえー!!」「

「きゃあー子供があっ!!」

「たっ、たのむっ!!連れてかないでくれえ!!」

次々と子供を攫っていく連中と、それを必死に止める大人たちの姿があった。

「（子供を攫っている奴らは海賊ではないな。奴隷商人か?・・・いや、それにしても妙だ。金品を奪っている訳ではないし、なににより動きが迅速すぎる。）・・・だが、悪党でることは間違いないさそうだな。」

リュウは腕を構える。

「おいっ！この子供で最後だ。」

「よし、ツラかる『パチンツ』ぶうわあっ！！」「！？っ」
『バタッ！！』

突然、仲間が倒れ驚く男。

「おいっ！？どうし」「お前達、何をやっている。」「！！？っ。」

男が振り向くその先には、リュウの姿があった。

「お前達、ただの人攫いではないな・・・何者だ！？」

「キサマが、やったのかっ！！？」

リュウの言葉を見無視し、男は戦闘態勢に入る。

「見られたからには、死んでもらうっ！！。剃っ！！」
「何っ！」

男は、六式の一つ、剃ソルを使いリュウの背後を取ろうとする・・・
だが。

『ガシッ！！』

「なっ！！」

「その程度の剃^{ソル}なら、能力を使うまでもない」

リュウは男の首を掴み、壁に押し付ける。

「さあ、言え。お前たちは、一体な『ブチッ』！？っ」

問いただしてる間に、男は下を噛み切り、絶命した。

「何だ！？こいつらは、・・・んっ！？」

リュウが男と対峙している間に、三隻の船は退散をしていた。リュウはすぐさま追撃しようとしたが、三隻の船はドンドン加速して離れて行った。

「ちいつ、無理か。それにしても唯の船の速度ではないなあ。おそらく、加速エンジンを積んでいる。・・・一体、やつらは「お願いすけてえっ！！」ん！？。」

後ろを振り向くと、そこには客船の乗客者達がいて、リュウに助けを求めに来た。

「私のおっ！！私の子供を助けてえっ！！。」

「乗客の子供達が全員連れて行かれたんですっ！助けてくださいっ！！おねがいますっ！！」

乗客と船員に助けを求められ、リュウはしばし考え込む。

「（あいつらはタダの人攫いではない。剃ソルを使えるということとは、あきらかに特殊訓練をつんだ者だ。それに、行動も迅速のうえに無駄がない。やつらは、・・・・・・まさか、政府！？。しかし、何故政府が「コトツ」ん？。」

リュウは何かを蹴った事に気づき、それを拾い上げる。

「これは、エターナルボース永久指針。」

拾い上げた物は、エターナルボース永久指針であり、さらにその指針は三隻の船が逃げた方向を指していた。

・ 「これは、奴らの物かあ。・・・どうも、やな予感がする。
・・・後を追ってみるか。」

リュウは^{エターナルボース}永久指針を使い、三隻の船を追って行った。

第4話（後書き）

えゝ終わりです。この話は、おそらく後2ゝ3話は続くと思います。ちなみに、この時のリュウの年齢は19です。

第5話（前書き）

前回の続きです。

第5話

エターナルボース
永久指針を手に入れたリュウは、子供達を攫った3隻の船の後を追って、船を進めていた。その後ろには、先ほど襲われた客船もあった。……子供達が心配で、親達が無理に動向を頼みこみ、リュウは渋々、動向を許可した。

「（全く、世話のかかる親達だ。俺が賞金首だと知ったら、どんな顔するのやら……だが、子供を思う気持ちは本物のようだな）」

3隻の船を追ってからまる二日たった頃、リュウと客船は、カムベルトの帯付近にたどり着いた。どうやら、3隻の船はカムベルトの帯を渡ったようである。

「ただの船がカムベルトの帯を渡れる筈がない。船底に海棲石を敷きつめでもない限りは……これは、政府が絡んでいるには確かだな。……おい、あんた達！」

リュウは、後ろに着いてきていた客船の乗員達に声をかける。

「ここから先は、その客船では進むことはできない。あんた達はここで待機しているお。ここからは、俺一人で行く。」

「でも、子供達が心配でっ！」

「あんた達が来ても何もできない。子供達に会う前に死にたくはないだろお。」

「ん、んう……。」「

リュウの言葉で乗員達は黙り、泣く々々了承した。

「子供を、私達の子供をお願いします！」

「……。分かったあ。」

リュウは笑顔で答え、乗員たちと別れた。……。そしてリュウは大気中の粒子を船底に集め、敷き詰めていった。

『シューウウウー————……。』

『ドッ——』

粒子を敷き詰められた船は、海面の上をまるでエアホッケーのよう^{カームベルト}に浮き、風の帯の中に入って行った。

「ふう〜、これで少なくとも海王類どもに気付かれずに航行でき

る。」

超大型の海王類が、それも軍艦さえ丸飲みするようなやつがウジヤウジヤ生息する、この風の帯。^{カームヘルト} けして倒せなくはないが、一々相手にするのは非常〜に面倒な為、戦いは避け、船を進める。

そして、船を進めること数時間、島が見えてきた。

「ん、指針はあの島を指しているようだな。」

リュウは船を島がよく見えるところまで進め、望遠鏡で確認する。
「……そこには、島の崖に接岸する三つの船の姿があった。」

「やはり、この島に居たか。……それにしてもあの崖、穴があいてるようだな、あそこが港になっているのかあ。」

望遠鏡で見ると、3隻の船から子供達が次々と下ろされているの
が見える。

「一体何を企んでいるのやら……（あそこで攻めれば、子供達にまで被害が及んでしまうな。……裏に、回るか。）」

そしてリュウは、島の反対側まで船を進め、砂浜に上陸する。……上陸したリュウの目の前には、森林が広がっていた。

「ほお、これは大した森林だな。だが、そこまで広い島ではない様だから、問題はないだろう。さて……出発前に、ミルクを一本。」 「カチッ」

「ゴク、ゴク、ゴク、ゴク……ぶあ~~~~！」

ミルクを一气飲みしたリュウは荷物をまとめ、あらためて出発し、森林の中に入って行った。……そしてしばらく歩いていると、リュウは所々に妙なところがあることに気付いた。

「（この道は、獣が歩いて出来た道ではないなあ。だが人間にしてみれば小さすぎる、……それに、何だ？。所々、木や石が破壊されているが？。） 『ザザッ！』 んっ!？。」

突然、茂みから何かが現れリュウを襲う。

「よつと!。」『ドゴウーン!!!』

「・・・なんとお。」

突然迫って来た謎の物体をかわしたリュウ。そして、飛んできた物体は近くにあった大きな岩に直撃し、その岩をコナゴナにふき飛ばした。・・・獣か?と思ったその先に、現れたのは

「子供?」

「う・・・う・・・うう。」

岩の中から現れたのは、まだ10歳にも満たなそうな小さな子供であった。

「おい!、一体どうし」うがあああつ!あ、あ、ああ「!?!。」

『ドサツ!』

突然うめき声を上げた子供は、地面に倒れた。リュウはすかさず無事を確認するが、

「死んでいる!？」

倒れた子供は、絶命していた。

「一体どうなっている、……………!？」

リュウは何かに気づき、振り向くと……………そこには数十人の子供達が現れ、一斉に襲いかかって来た。

「……………ぐがああああああつ!!!!!!」

「訳がわからんつ!!。クロックアップっ!」

次々と襲いかかってくる子供達。リュウは訳が分からなくなつて、手がつけられなくなっていた。クロックアップを使い、離脱する。……………そして、しばらくしてからリュウは木の上に隠れ、状況を整理する。

「あの子供達は一体何なんだ?。身体能力が異様に高かいうえに、まるで獣のよう……………いや、あれは自我を完全に無くしていた。一体この島は……………ん!？」

リュウが、ふと振り向くと少し離れた高台に小さな小屋を発見した。リュウは確認するため行ってみるが、その小屋はどこか妙であることに気付く。人が住んでいる気配はしないのに、小屋の周り全体を金網で囲んでいた。

「あやしい小屋だなあ……んっ！、人の気配！？。」

突然小屋から人の気配を感じたリュウ。そして、小屋からは作業着を着た大柄な男が二人出てきて、さらにその手には、すでに死体となっているであろう子供を抱えていた。そして金網の傍まで歩いてくると、

『ポイツ！』

「！？。」

男達は手に持っていた子供を金網の外まで投げ捨てた。男達は、全員投げ捨てた後小屋へと戻って行った。リュウはすかさず後を追うが、小屋の中に男達の姿はなかった。どこに行ったのか？とリュウは中を調べると、床にくぼみがあることに気づく。

「これは、隠し扉だなあ。」 『ガタッ』

「下り階段かぁ……こった作りをしている。」

そして、リュウは階段を下りていく……。

しばらくして階段を下りきったら、明るい通路に出た。しばらく中を歩くとリュウは壁の作りに疑問を感じる。

「この壁の作りは……ここは、何かの研究施設か？。……んっ！！」

リュウは誰かが歩いてくることに気づき、体を粒子に変え近くにあったダクトに隠れた。

「この前の実験は、うまくいかなかったなあ。」

「仕方ないさ、素材になった子供が悪かったんだから。まあ、新しく素材になる子供達がきたんだあ。また明日から実験さ。」

男達は、喋りながらリュウの下を通り過ぎて行った。

「行つたか。・・・それにしても、子供達が素材？実験？・・・きな臭い話だ。（しかし通路を歩くと気付かれそうだなあ、ダクトの中を進んでいくかあ）」

リュウはダクトの中を進んでいく。・・・しばらく進むと、人の声が聞こえてきた。リュウは声がする部屋に行き、通気口から覗くとそこには、

「まだ、反対するきなのかね？」

「当然ですっ！！」

そこには、下着姿で両手を壁に縛られている、二十歳そこそこの女性と、その女性に銃を向けるスーツを着た政府の要人の姿があった。

リュウはその二人の会話を聞いて行く。

「君は優秀な研究者だ。このまま死なせるには惜しいのだよ。・・・このまま、私達政府に協力してはくれないか？」

「何度も言っているはずですよ！！。私はこんなことをするために研究をしているのでは、ありませんっ！！。何度言われても、私の答えは変わりませんっ！！。」

「そうかぁ．．．なら、死んで貰「クロックアップ」 う．．
う。」『ドサッ!』

「えっ!？」

突然、相手が倒れたことに驚く女性。そして顔を上げると、そこにはリュウの姿があった。

「愚かなうえに、ハレンチすぎる!。」

「あ、あなたは!？」

「ん?、俺の名はリュウ。流離人だ。」
りゅういびと

リュウは、女性の繋がれたてをほどいてやり、近くにあった白衣を女性に羽織った。

「子供を攫っていった船を追って、この島にやって来たんだがぁ．．．
．．．どうやらあんたは、この島で何が行われているのか、知ってるようだなぁ．．．話してもらおうか。」

リュウはサングラスを外し、静かに女性に問いかける．．．。

続く。

第5話（後書き）

書いてく内に、どうもスパイ映画みたいな感じになってしまいました。が、けしてそんなつもりはありません。

第6話（前書き）

前回の続きです。

第6話

研究施設の中に潜入したリュウ。そこで、この施設の研究員である女性を発見し、この島で何が行われているのか、事情を問います。

「あなたは、政府の人ではないんですか？」

「何が悲しくて、政府なんぞにならなければならんだ。俺は攫われた子供達の親に頼まれて、子供達を助けにやって来たんだ。」

「！！？、お願いしますっ！！協力してくださいっ！！」

「ん！？」

女性はいきなり掴み掛って協力を求めにきた。

「私と一緒に、子供達を助けてくださいっ！！。このままでは子供達がっ！！、子供達がっ！！」

「まず、事情を話せ。こっちはこの島について何も分かっていないのだから。」

リュウは興奮している女性を落ち着かせ、改めて事情を聞く。

「あ、ハイ、すみません。・・・わたしはこの島で、遺伝子工学を研究していた、メローナと言う者です。」

「遺伝子工学？」

「ハイ。遺伝子工学とは、生物の中にある遺伝子を人工的に操作する技術で、私はそれを医療に使うための研究をしていたのです。」

「ほおゝそれは大した研究だなあ。・・・だが何故、あんたは拘束されていたんだ？、そこが謎なんだが。」

彼女の素性は分かったが、どうして殺されそうになっていたのか、分からなかった。

「私が、この島で来てから3年ほど経ったころ、世界政府の方と、所長との会話を偶然立ち聞きしてしまい、政府がとんでもない計画を持ちかけてきたことを知ってしまったのです。」

「計画？、それはあ・・・」

「強化人間、計画です。」

「強化・・・人間？」

「ハイ。人間の遺伝子を強化改造し、恐ろべき人間兵器を作り出す計画です。」

「……………呆れたものだな。」

リュウはこの島で行われている事を知り、あきれていた。だが、一つだけ気がかりになっていることがあり、それをメローナにたずねる。

「何故、子供を攫っていったんだ？。それに、ここに来る途中たくさんの子供達に襲われたんだが、あれはなんだ？。」

「そ、それは、……………強化人間に最も適した素体がつ……………子供だったからです。」

「何っ？」

「身体が完成形になっている大人では強化には限度があります。無理に強化しても遺伝子が壊れ、数日しか生きることができない……………それでつ、成長と共に遺伝子を改造し、より強い強化人間を作ることができる、子供が素体選ばれ……………たの……………です。」

「何という、愚かなあ！」

あまりに身勝手に愚かな研究に、リュウは怒りさえこみ上げてきた。

「それであんたも、それに手をかしてい「違いますっ……………！」？」

力一杯に否定するメローナに、リュウは驚く。

「私はその計画を知った後、すぐに所長に抗議をしに行きました。ですが所長は、一切、私の声を声を聞かず、政府の人たちと計画進めていきました。他の研究者達も、政府が係わっていると知るや否や目の色を変えて協力をしました。……私は、最後まで計画に反対し、ここに拘束されていました。……。」

「では、島の中をうろついていた子供達は？」

「恐らく、強化実験に失敗して、廃棄されたのだと思います。」

「……哀れな、子供達だ。」

「私はこれ以上、罪もない子供達が犠牲になっていくのを、見たくないんです！。お願いします、私に協力してくださいっ！！」

必死に頭を下げ、協力を頼んでくるメローナの姿を見て、リュウはしばし考える……。そして、

「一つだけ、聞きたい。」

リュウはメローナに顔を近づけ、サングラスを少しだけツラし、彼女に問う。

「あんたは、子供達のために命をかける覚悟が、あるか？」

「・・・・・・・・ハイっ！」

メローナは、揺るぎない意思を瞳に込め、返事を返す。

「いい眼だな・・・・・・・・よし、いいだろお。では、案内を・・・・・・・・その前に服を着た方がいいなあ。」

「！？、あつ！！。」

メローナは自分の姿を見て、あわてて服を着だす。

「み、見ないくださいよ！！。」

「心配するな。俺は、痴女ちじょなんぞに興味はない。」

「だれが、痴女ですかあ！！。」

「散々下着姿のまま、お喋りしてたくせに何をいつている。・・・・さっさと着替えて、案内をしてくれ。エローナさん。」

「メ・ロ・・・・・・・・ナですっ！！。」

茶化すリュウを罵倒しながらメローナは服装を整え、準備する。

「ふうゝ・・・では案内します。こちらに「その必要はない
っ!」・・・!?っ。」

突然声がし、部屋を見渡すと、

「電伝虫^{でんでんむし}っ!」

「君たちはここで、おしまいだあ。」『ガジャンッ!』

「なっ!」「えっ!?!」

突然、床下が開き、二人は落ちていった。

「また、こつたつくりをお」

「きゃーーーーー!?!」

どんどん落ちていく二人。・・・そして、下が見えてきて、リ
ユウはメローナを抱え、着地する。

『スタッ！』

「あつ、・・・ああ。」

「大丈夫か？」

「あ、ハイ何とか。・・・ここは「よくきた！」！?。」

ふと、二人が見上げると、ガラス越しに話しかけてくる、白衣の男と政府の人間の姿があった。

「所長っ！」

「あいつが？」

「二人ともようこそ。私はこの研究所で所長を務めている、Dr・コロンブスだあ。」

所長ことDr・コロンブスは電伝虫^{でんでんむし}を使って、二人に話しかける

「要人の方が中々戻ってこないから調べてみたが、まさか侵入者がいたとはなあ。・・・悪いが、ここに招かせてもらった。」

「たしかに、話に夢中になり過ぎて油断したなあ・・・俺はまだまだ未熟者だ。」

「メローナくん。私達に協力してはくれないかあ？。君は優秀な研究者だあ、このまま死なせるのはあまりにも惜しい。」

Dr・コロンブスはメローナを説得するが、彼女は断固、否定する。

「私は、何度もいました。これ以上、罪もない子供達を犠牲にするくらいなら、私は死を選びますっ！！」

「そうかあ・・・残念だよ。では、二人には死んでもらおう。」
『カチッ』

『キョオーーーーン~~~~~』

「ん？」

コロンブスが手元のスイッチを押すと、リユウ達の近くにあったシャッターが開く。そしてその中から、百人を超える戦闘服を着た子供達が出てきた。

「この子たちは、私が造り上げた強化人間だ。マインドコントロールで、わたしの言うこと聞くようになっている。」

「自慢の玩具で、俺達を始末するということかあ。」

「理解が早くて、助かる。・・・では、はじめろ！！」

合図と共に、一斉に襲いかかってくる子供達。リュウは、メローナ抱えながら回避する。

『シュツ！』『ビュンツ！』『シュツ！』『シュシュツ！』

「ほお〜かなり早い攻撃だあ。さすが、強化人間と言ったところか。」

次々と繰り出される攻撃をかわすが、リュウは攻め手に困っていた。

「（ロクに鍛えていないこいつを抱えたまま、クロックアップをするのはまずいなあ……。仕方がない。あれを使うか。）」

リュウはある程度、距離を取ると立ち止り、抱えていたメローナを床に置く。そして、立ち止ったリュウに向かって、子供達が取り囲み一斉に襲いかかったその時、

「クロックダウン。」 『スウ！！』

リュウがそう呟いた瞬間、辺りは時間が止まったかのように静止した。……いや、正確には止まって見えるくらいに、スローモーション

ヨンに動いている。

「しばらく、眠っていてもらうぞお。」

『シュッ』『シュッ』『シュッ』『シュッ』

そしてリュウは、子供達全員に手刀を浴びせ、気絶させた。・・・
・全員気絶させた後、リュウはクロックダウンを解除する。

「えっ!?!」「何っ!?!?」

ふと、気付いたら子供達が全員倒れていることに、その場に居たリュウを除く全員が驚きの声を上げていた。

「はぁ~~~~しんどい。この技は、クロックアップと違って大気中の粒子を操って使うから、つかれるなあ。」

リュウが今使ったクロックダウンは、体に流れる粒子を使うクロックアップと違い、大気中の粒子で時間流の流れを操作するため、かなり体力を消費する。

「何がっ、どうなっているっ!?!?」

「おいコロンブス。全員、倒したがどうする？。まだ、続けるかあ？」

「ちょ、調子に乗るんじゃない！！。こっちにはまだ、切り札があるっ！！」『カチッ』

そういつてコロンブスは、また、手元のスイッチを押す。そして、再びシャッターが開くと、そこには一つの小さな影があつた……。

続く。

第6話（後書き）

次で何とか、この話を終わらせたいと思います。

第7話（前書き）

前回の続きです。この回で終われるか、わからなくなりました。

「ん？、知ってるのか？」

「あ、ハイ。この子は半年ほど前にこの島の浜辺で発見され、保護された赤子なんです。……まさか、この子もっ！？」

「そうであ！。これが、私が作り上げた最高の強化人間、ウエポン？（テン）であ！！。ハハハハハっ！……」

自慢の切り札を出して、高らかに笑いだすコロンプス。そして、リュウは

「こんな赤子にまで改造するとは、何んと愚かなあ。……にしても、羽をはやしているということは、空島の子か？。」

「お喋りは、そこまでなあ！。さあ、そいつらを殺せっ！！、ウエポン？（テン）！！」

コロンプスの合図で、ウエポン？（テン）は戦闘態勢に入り、宙を舞う。それを見てリュウは、疑問を感じている。

「あれ？。空島の人間で、空、飛べかあ？」

リュウが少し考え事をしたいた、その瞬間っ！！。

『ビュンッ！！！！』

「んっ！！！？」

物凄いスピードで突っ込んできた。リュウは咄嗟にかわすが、

『ビューーーーーンッ！！！！』

「何っ！！！？」『ドオンッ！！！！』

『ドオゴオーーーーーン！！！！！！！！』

ウエポン？（テン）は、物凄い勢いで急ターンし、リュウに突っ込んできた。咄嗟のことでリュウは、回避行動が遅れ、吹き飛ばされて、壁にめり込んだ。

「いたたたた、何て俊敏な動きだあ。それに、かなりの威力があったぞ。」

目の前で羽をパタパタしながら宙を浮いている赤子の、異常な身体能力に驚きを隠せないリュウ。あまり手加減はできない相手だと悟り、リュウは反撃にでる。

「赤ん坊であるお前には悪いが、すぐに終わらせてやる。」

クロックアップ！」

リュウはクロックアップを発動させ、相手にパンチを繰り出した。

『バシッ！！』

『ドンッ！！』『ドサッ！』

「悪いが、戦うと決めた相手には、容赦はしな　『スタッ』　い、なぬっ！？」

攻撃をくらったウェポン？（テン）は、何事もなかったかのように立ちあがった。その体には、傷一つ付いていない。

「おいおい、本気ではないとは言え、手加減はしなかったぞ。」

「ぐっははははは！！、ウェポン？（テン）にその程度の攻撃は効かんぞお！！。さあ、ウェポン？（テン）！、お前の本気を見せてやれえ！！」

そう言われるとウェポン？（テン）は、突然光り出し、電流を帯びた。その電流をリュウに向ける。

『ビビビビビビビビビビビビッ！！！！！』

「のおあつとー!!」

『ザザザザザザザー————ン!!!!!!』

「……おいおい。」

とつさに避けたリユウ。リユウが避けた辺りは、広範囲で丸焦げになっていた。

「すごい威力だなあ!。これをまともにくらえば、いくら俺でもヤバいな。それにしてもあの赤ん坊、ただの空島の人間じゃないな、能力者か?」「それは違う!」「ん!?!」

突然、コロンプスが話しかけてくる。

「ウエポン?(テン)は能力者ではない。こいつの正体は、数百年前まで空島で生きていた亜人種の、末裔だ。」

「亜人?」

「その亜人は数は少なく見た目も空島の人間にそっくりだが、空島の人間を遥かに超える身体能力を持ち、背中の羽根で空を自由に舞い、さらに電流を操る力を持っているのだ。」

そこで、メローナが口を開く。

「しかし、この子はこの島の浜辺で発見されたはずですよ！。それが、何故この島に！？」

「文献によると、その亜人共の力に恐れた空島の民が、一人残らず、青海に追放したらしい。すでに、滅び去ったと言われていたが、どういうわけかその赤子がこの島に流れついた。」

コロンブスの丁寧な説明に、リュウは関心しながらしっかり聞いている。

「私はすぐにその赤子の肉体を調べて、驚きを隠せなかった。優れた肉体、自在に飛びまわれる羽根、そして、強力な電流の力。これを使えば、最高の強化人間を生み出すことができるよ！！」

「そ、そんな。」

「私は、喜びに震えた。何よりもウェポン？（テン）を生み出した、この私の才能をつ！！」

「…………愚かな、奴だあ。」

リュウは、誇らしげに自分の才能を語るコロンブスの姿を見て、心底呆れていた。

「さあ、ウエポン？（テン）！！。そいつらを殺せ、お前の力を
見せてみろっ！！」

コロンブスの指示で、ウエポン？（テン）はリュウ達に次々と、
電流を繰り出した。リュウは、メローナを抱えながら、回避を続け
る。

『ザザザッ！！』『ザザザッ！！』『ザザザッ！！』

「くそお、面倒な相手だあ・・・。（下手に本気を出せば、あの
子が死んでしまうなあ。できれば、死なせたくないし・・・。
ここは、自分の技で倒れてもらうか。）」

リュウは、距離をとって抱えていたメローナを降ろし、ウエポン
？（テン）の前に立ち足はだかる。

「さあ、かかってきなあ！。一発で仕留めてやる。」

「ずんぽりおって！。やれっ！！、ウエポン？（テン）！！」

『ビビビビビビビビビビビビビビビビッ！！！！！！！！！！』

リュウは相手を挑発し電流を出させる。どんどん迫ってくる電流

に、リュウは静かに構え、そして、

「その場限りの必殺技、『パーティクル粒子の道』。」

『ビビビビビューーーーーンッ!!!!』

リュウは手から放った粒子でU字に道を作り、綺麗に電撃をUターンさせ、ウェポン? (テン) に返した。

『ザザザザーーーーーッ!!!!』

返された電流を見事にくらったウェポン? (テン) は、ぐったりと倒れ込む。

『ドサッ!!!』

「おおー、見事命中。これだけの威力の電流を浴びれば、いくら奴『スウ!』・・・で・・・も・・・。」

電流をまともにくらったウェポン? (テン) だったが、ゆっくりと起き上がってくる。

「マジかあ。なんて、タフな赤ん坊だあ。」

「は、は、はははは、さすが私の最高傑作だあ！。ははははははははっ！！、さあ戦え！！。そいつを、殺すんだあ！！！」

笑いながら指示を出すコロンブス。・・・だが、ウエポン？
（テン）は全く動こうとしない。

「！？、どうしたっ！！ウエポン？（テン）！！。早くそいつを、殺すんだあ！！！」

再び指示を出す、ウエポン？（テン）は全く動かない。それどころか、突然周りをキョロキョロと見渡し、リュウの顔を見たとき、羽をパタパタと羽ばたかせ、ゆっくりと近づいてくる。・・・そして、

「クピイー！」

「えっ？」

何故かウエポン？（テン）は笑顔で手お上げ、リュウにあいさつをする。その様子をガラス越しに見てたコロンブスはと言うと。

「何が、どうなっているんだっ！！。ウエポン？（テン）！！、私の言うことを聞けえ！！！」

怒鳴り声を上げて、命令を下すコロンブスだったが、それを見たウェポン？（テン）は、静かに電流を帯び、そして、

「クププイーーーーっ！！！！！」

「」「」「ぎいやあああああああああ！！！！！！！」
「」

ウェポン？（テン）が繰り出した電流は、ガラスを突き破り、中に居たコロンブスと傍にいた、政府の要人たちを黒焦げにし、倒した。

「クプウッ！」

「……………どうなってるんだ？」

「お、恐らく、さっきの電流を浴びて、マインドコントロールが解けたのでは、ないかと。」

メローナに説明を求めたリュウ。そしたら、ウェポン？（テン）が再びリュウに近づいてきて、

「ん？、何だ。」

「クピ、クピ。」

「俺？、俺が誰だって？。」

「クプウ。」

首を縦に振る、ウエポン？（テン）。

「……俺の名はリュウ。流離人だ。」

笑顔で答えたリュウは、ウエポン？（テン）を抱きかかえて、頭をなでる。

「よかったなあ、お前。マインドコントロールが解けて、正気にもどつてえ。」

「クピ、クピ、クプピィ。」

頭をなでられ、喜ぶウエポン？（テン）。……その二人の光景を傍で見ていたメローナは、啞然としている。

「あ、あのお。その子の言ってること、わかるんですか？。」

「ん？、なんとなく。……どうやらこの子は、悪い奴の区

別がついてるみたいだ。」

リュウは、しばらくなでてやると、ウェポン？（テン）を降ろす。

「さてと、意外とあっけなく終わっちまったなあ。．．．それじゃ！」

リュウは、コロンブス達が居た所に、目をやる。

「あそこで寝てる奴らを、問いたいですか．．．。」

リュウは、二人を連れてコロンブスのもとへ行った．．．．．

続く

第7話（後書き）

終わりませんでしたあ、すみません。次こそ、この話を終わらせます。

第8話（前書き）

続きます。この回で、この話は終わらせます。

第8話

ウエポン？（テン）のおかげで呆気なく勝利を収めてしまったり
ユウは、メローナを連れて、Dr・コロンブスのもとへ向かった。
ウエポン？（テン）もリュウの後についてくる。

「ふうん……おっ！、まだ生きてるな！。こいつも案外タフだなあ。」

リュウは、コロンブスの体を起こし、叩き起こす。

『バシッ』

「ぐはっ!!」

「ほら、さつさと起きろ！」

意識が戻ったコロンブス。辺りを見渡すと、もはや完全に追い込まれている状況であることが分かり、肩をおろした。……そして、

「殺せ。」

「何!？」

「強化人間達が敗れ、切り札であつたウェポン？（テン）が離反してしまつた以上、私に手は残されてない。……さつさと殺すがいいっ！！」

「……………そうかあ。」

コロンプスの言葉で、リュウは静かに手を上げる。……だが、それをメローナが止めた。

「待つてください！！」

「ん？」

「所長には、子供達を元に戻してもらいます。それに、この子もそれは、無理だ！。」、え！？」

メローナの言葉を、キツパリと否定し、話を進めるコロンプス。

「一度、強化した人間は元に戻せない。下手に戻せば、遺伝子そのものを破壊してしまい、死んでしまう。特にウェポン？（テン）は、成長遺伝子を徹底的に戦闘向けに改造しているため、もうそのまま年をとることも、できないだろあ。」

「そ、そんなあ……………」

「私のために、徹底的に改造したからなあ…………ふっ」

「……………何で。」

説明し終わると、鼻で笑ったコロンプス。その態度に激怒したメローナは、コロンプスに声を張り叫ぶ。

「何でこんな事を、しでかしたんですかつ!!。あなたほどの科
学者なら、こんな馬鹿げたことをしなくても、もっと上を目指して
「違っつ!!!!」、「!?!」

「違っんだよっ!。私はこれ以上、上には行けなかったんだよっ
!!」

「どういう意味だ?」

突然、反論するコロンプスに対して、メローナは口を閉じてしま
うが、リュウが意味を問う。

「……………私は、かつて海軍本部科学部の所長を務めていた。
私はそこで、地位を持ち、己の腕を誇りに思い、研究に励んでいた。
」

コロンプスの話を、一同は真剣に聞きいれる。

「だが、そんなある日、私の前にあの男が現れたのだ!!。」

「あの男?、それは一体だれですか?。」

「Dr・ベガパンクだあ!!。」

「ベガパンク。・・・確か、ここ数年、政府が見つ付けてきた、世界最大の頭脳を持つとか言う科学者か?。」

「そうだあ。奴の腕と頭脳は凄まじく、やつの科学力は、これから人類が500年かけて到達する域だと、言われている。」

「な、何ですか!? そのとんでもない話!。」

計り知れない人物の話しを聞いて、メローナは驚きを隠しきれずにいる。

「ベガパンクが現れてから、私の全てが変わってしまった。奴に所長の地位を奪われ、誇りも奪われ、何より私は、悟ってしまったのだ。・・・私がいくらあがこうとも、絶対に奴の腕には届くことはないとつ!!。・・・そんな時、政府が私の前に現れたのだ。もう一度、我らのために腕を振るわないか、と。」

そこまで聞いたりユウは、少し表情をかえた。

「私は、知らしめたかったっ！！。この強化人間の技術で、もう一度世界に私の腕を知らしめたかったんだあっ！！。………だがそれも、もう終わりだ。私が造り上げた強化人間は、お前達に敗れ、頼みの綱であったウェポン？（テン）でさえ、このザマだあ。……もう、思い残すことはない。さあ、殺せっ！！」

高らかに叫び、死を望むコロンプス。その姿を見たリュウは、コロンプスにゆっくり近づき、手を上げる。一同はそのまま、殺すかと思ったが、リュウは自分の顔に手をやり、サングラスを外した。そして、リュウは口を開く。

「……ふっ、哀れな男だ。」

「……！！？」

リュウは、今のコロンプスを見て、鼻で笑ったのである。その行動を見てた、一同は戸惑いを、隠せないでいる。……だがリュウは、さらに続ける。

「才能がある奴に限って、思ってしまうんだよあ。自分だけは特別だ、てな。……お前は未だに愚かな期待を、抱いている。自分は天才だ、同じ人間なのだから、けして追いつけないはずがないんだ、と……その歪んだプライドが、今のお前を作り上げている。」

笑いながらリュウは、コロンブスを否定している。そしてリュウは天に指を指した。

「死んだ船長は、言っていた。．．．プライドを持つことを許されるは、確固たる信念と覚悟を持つ者だけだどっ！！」

そう宣言したリュウは、コロンブスの首を掴み、持ち上げる。

「ぐうつ！」

「お前には生きる価値がない！．．．だが、死ぬ価値もない。お前は苦しめることにする。」

リュウは右手を、コロンブスの顔に近づける。．．．そして、

『グニユッ！』

「ひいつ！！」

『ブシューーーーーン！！』

「ぐうああああああああああっ！！！！！！！！！」

リュウは、コロンブスの目に指を突き刺し、えぐり取ったのである。その光景を見て、メローナは思わず、悲鳴を上げた。」

「ぐうわっ！ーぐ、ぐ、ぐ、ぐうっ！！」

「お前は一生、闇の中で生きる。お前のような人間に光など、必要ない。」

そう言い残したりユウは、サングラスをかけ直す。リュウは、コロンブス突き放し、後ろの二人を連れ部屋を後にした。そして、部屋に残ったのは、目をえぐり取られ、もがき苦しむコロンブスの姿だけが、残った……………。

…………部屋を後にしたりユウとその他一同、歩いている間、メローナが何か思い詰めたような表情をしていた。…………それを見たリュウは彼女に声をかける。

「…………あいつに、同情などしても、意味はない。」

「えっ!？」

「あんたは、根が優しい人間だ。だから、相手がどんな悪党でも、同情してしまうんだろうお。」

リュウは、真剣に彼女に語る。

「相手の心情を理解するのはいいことだが、だが、それで甘やかすのはよくない。・・・それではいつか、取り返しの付かない事態を招くことにもなる。」

「・・・・・・はいっ。」

「奴のことは、もう考えるな。それより、攫われた子供達を。」

「あっ!？、はいっ!。私が案内します。こつちです!。」

リュウの言葉で、メローナは気持ちを切り替え、子供達の元へ行く。・・・そして、部屋の前にとどり着き、扉を開くとそこには、数十人は超える攫われた子供たちの姿があった。

「全員、ぶじかあ？」

「!？、おにいさんたち、だあれ!？。」

「俺の名はリュウ。君達のお父さん、お母さんに頼まれて、助け

に来たんだあ。」

「えっ!?!、じゃあ、パパとママにあえるのっ!?!」

「ああ、もう大丈夫だあ。」

笑顔で答えたリュウに、子供達は喜びの声を上げた。

「さあ、みんな。このお姉さんに着いて行くんだあ。メローナ、船の元まで案内してくれ。」

「あ、はい!。さあみんな、私についてきてえ!」

メローナの案内で、船のある港に向かうリュウ達、一同。……
・そして、港に辿りつくが、そこには、思いがけない人物がいた。

「えっ!?!」

「お前達い……この島の研究者かあ?」

突然、立ち止るメローナ。リュウはその先に目を向けると、そこに、海軍本部中将の勲章を付けた男と、その後ろに数人の海兵、さらにその後ろには軍艦の姿があった。

「海軍本部中将？……お前ひょっとして、クザンかあ？」

「ん？、俺を知ってるのかあ？」

「有名だぜ。時期、大将候補とまで、言われてるからなあ。」

リュウ達の前に立っている男は、何と後^{のち}に大将となるクザン、こ
と青キジであった。

「そうかあ……てか、お前さん「流離のリュウ」じゃ、ない
の？」

「あら、俺のことも知ってるか？」

「そりゃあ、有名だよお。王下七武海に勧誘まで、されてるんだ
からあ。」

「それはそれは。」

二人の会話に、メローナは全くついていけない。

「……そんでまあ、何でお尋ね者のお前がいるんだあ？」

「ん？ああ、俺はこの子たちの親に頼まれて、攫われたこの子た
ちを助けに来たんだ。この島で、変な実験に使われそうになったん
でな。詳しいことは、こっちのメローナに聞いてくれ。……メリ

「ナ。説明を、頼む。」

「あつ！ハイっ！。・・・実は、」

メローナは、この島で行われていたことを、包み隠さず話した。

「それはそれは、大変だったじゃないのお。この島は政府が管轄してたけど、不当な実験をやってるって有名だったからなあ・・・
・所で、流離。子供達の親に頼まれたっていったが、ひよつとして^{カムペルト}風^{カムペルト}の帯付近にいた、客船の人たちか？」

「あれ、知ってるのか？」

「偶然、近くを通って見つけたのよお。んでもって調べたら、子供達が攫われたって聞いてねえ、こうして、来たんだけど・・・
・・・その様子だと、もうだいたい終わったようだねえ。」

「そうか。じゃあ、話は早いな。この子たちの保護を頼む。後、中に実験に使われた子供達もいるから、そっちも頼むぜ。」

「んまあ、わかった。というわけで、艦長お。」

「ハっ！！」

クザンは、軍艦の艦長に声をかけ、指令を出す。

「中に入って、救助を頼む。後、後始末も。」

「了解しましたっ!!。おいっ!、行くぞっ!!!」

「」「」「はっ!!」「」「」

艦長は数人の海兵を連れて、中に入って行った。

「んじゃあ、後は俺達でやるから、お前はいつていいぞあ。」

「ん、俺を捕まえてなくていいのか?」

「今、お前さんを捕まえるとなると、こっちも唯ではすまないからねえ。ちゃんと戦力を揃えてないと痛い目にあうから、今は見逃す。」

「そうかあ、じゃあ俺は行く。後は頼むぜえ。」

そう言っ てリュウは、去ろうとするが、

「ちょ、ちょっとまってくださいっ!」

「ん?」

突然、メローナに引き止められた。

「何だ?。」

「まだ、お礼を言ってませんでした。．．．本当にありがとうございました。．．．ただ、一つだけ、お聞かせ願いたいのです。が。」

真剣な顔になるメローナ。

「あなたが、お尋ね者であると伺いました。．．．何故、そんなあなたが、．．．子供達を助けにここまで、やってきたんですか?。」

「そりゃ、俺だって人間だ。人情はあるし、物事はちゃんと理解している。．．．なにより、」

リュウは海の方角に顔を向ける。

「仲間や家族を失うというのは、ものすごく辛いことだからなあ．．．．．」

そう語るリュウの顔は、どことなく悲しみを包んでいた。と、そこで、子供達の中から女の子が一人駆け寄ってきた。

「お兄さん！」

「ん？」

駆け寄ってきた女の子はリュウの前に立ち、そして

「えへ！、たすけにきてくれて、ありがとうー！」

笑顔でお礼を言ってきた女の子、それに対して

「ああ、良かったなあ」

リュウもサングラスを外して、笑顔で返す。・・・その姿を傍で見ていたメローナは自然と、笑顔になった。

「それじゃあ、そろそろ「クピイ」ん？」

行こうとしていたリュウの肩に、ウェポン？（テン）がひっ付いてきた。

「クピイ、クピイ、クピイプー。」

「何、俺と一緒にいきたいって?」

「クプウ。」

「……いいのか?」

リュウは、メローナに了承を求め。

「ふふ、いいんじゃないですか?。その子もリュウさんになついているようですし。」

メローナは、笑顔で返事を返した。

「ん〜……ま、いつかあ。よし、それじゃ今度こそ行くおう!」

「クプウー!」

「はいっ!。お二人も、どうかお元気で!!」

笑顔で見送るメローナ。リュウとウェポン?(テン)は、その場をあとにした……。

「……………そして、船に戻ってきたリユウは、ウエポン？
（テン）の仲間入りを祝うため、ミルクを用意した。」

「それじゃ、新しい仲間入りを祝って、乾ぱい！」

「クプーウー!!」

「ウエポン？（テン）と乾杯をすたリユウは、ウエポン？（テン）
の飲みっぷりに関心していた。」

「おおー、ミルクがうまいかあ？。」

「クッピー。」

「そうかそうか、ミルク好きに悪い奴はいない。……………そう言
えばお前の名前、長ったらしくて言いづらいんだよなあ……………
・よし、今日からお前の名前は「テン」だあ、テン。」

「クピ？……………クプピーー!!」

笑顔で喜ぶ、ウエポン？（テン）改め、テン。

「そうかあ気にいったかあ。いや、一人旅が長かったからこれで少しは『カジカジカジカジ』楽しく・・・カジカジ？」

おかしな音がし、振り向くと、テーブルをおいしそうに食べる、テンの姿があつた。

『カジカジカジカジカジカジカジ。』

「・・・テーブル食べちまってるよお、とんでもない赤ん坊だなあ・・・。」

続く

第8話（後書き）

正直に言います。ガッチャんのパクリキャラです。たぶんこの先、こついったキャラが出でくるところなので、ご了承ください。

く外伝く
(前書き)

リュウが、テンと供に島を出る前の話です。

く外伝く

メローナに別れを告げたリュウは、テンと供に島の裏側に止めた船に戻るが、付いた途端、テンが突然近くに砂浜に飛んでゆき、何かを見つける。

「クプウ、クプウ。」

「ん？、どうしたんだ？。」

リュウは、何か？と確認しに行く。そして、そこにあつたものは、

「・・・・・・・・白骨？。」

そこに有つたのは、白骨化した死体であつた。リュウはそれを、よく観察する。

「大きさと形から言つて、女性の者かぁ。それに、この背中に付いているものは・・・・・・・・。」

その白骨には奇妙な骨が付いていた。それは一見、羽のようにも見え、そしてリュウは、ふ、と何かを思いつき、テンの方を見る。

「・・・・・・・・・・母親かあ。」

そう、答えに行き着いたリュウ。おそらく、この方はテンと供にこの島に流れつき、先に生き倒れ亡くなってしまったのだろう、と思いきと、見つめる。・・・・・・・・・・そして、

「・・・・・・・・埋葬してやるか。」

リュウは、その女性の遺体をそっくりと運び、近くにあった大きな木の下に埋めた。そして、十字に作った板を刺し、墓を完成させた。・・・・・・・・テンはその墓をじっくりと見つめている。

「ん、どうした?。」

「・・・・・・・・・・」

リュウの言葉に耳を貸さないテン。だが、リュウはテンのそんな姿を見て、何となく悟った。おそらくこの子は気付いてるのだと。この人が自分の母親であると、そしてもう会うことが出来ないのがあると。・・・・・・・・そして、テンから静かに涙が流れる。・・・・・・・・それを見たリュウはテンを抱きとめる。

「クピィ・・・・・・・・。」

「今のうちに、たくさん泣いておけ。人間、涙を流せる内が幸せというものだ。」

リュウは、テンを気が済むまで泣かせ、船に乗り込み、テンと供に島を去っていった。……」

終わり

ゝ外伝ゝ（後書き）

本編で書くことと思ったのですが、間が悪かったなので外伝としてだしました。

第9話（前書き）

前回の話時から、数日後のお話です。

第9話

テンを仲間にしたリュウは、グランドラインを気が向くままに航行する。

「クプウ、クプウ。」

「コラコラ、歯磨き粉が垂れてるう。て言うか、何でわざわざ俺の頭の上で、歯を磨くんだ？」

朝目覚めたリュウとテンは、顔を洗い、歯を磨いていた。それが終わるとリュウは朝食の準備に取りかかる。

「さてと、朝食、朝食と・・・・・・・・て、あれ、材料がほとんどないなあ。」

朝食を作ろうとしたリュウだが、食料が少なくなっていることに気づく。

「そういえば最近、ロクに仕入れていなかったからなあ、・・・とりあえず、ミルクだけでも『カジカジカジ』てっ、コラあ！テン！。椅子をたべるなあ！」

「クプウ？」

椅子を食べるテンを叱るリュウは、ミルクと保存食のチーズで朝食をすませた。そして、これからのことを考える。

「とりあえず、食料を仕入れないとなあ。それに、家具や道具もテンの奴がやたらとカジっちまうからボロボロだし、そろそろ「クブクプー!」、ん?どうしたあ?。」

外に出ていたテンが声を上げ、リュウは確認しに行く。そしたら、テンが左舷に指をさしていて、その先を見ると、そこには二つに並んだ島があつた。

「おお、島だあ!、ちょどいい。・・・にしても珍しいなあ、二つの島が並んでるなんてえ。まあいい、町が見えるから人も住んでいるだろうし、あの島で食料をしいれるか。」

リュウとテンは、進路を変え島へと向かった。

．．．．．そして、リュウ達は島に上陸した。船を港に泊め、テンと供に降り立ったが、リュウはその町が少し不自然であることに気付いた。

「．．．．何だ？、ここ連中は．．．．元気がないなあ。」

この町は、どこかおかしかった。街並みは綺麗なのに、人々にあまり活気がなかった。リュウは近くにいた、漁師に話を聞いた。

「おおーい、そこのおっさん。」

「ああん、なんだあ？」

「少し聞きたいんだが、この島の連中はどうしたんだ？。みんな元気がないみたいだが。」

「っ！、どうしたも、こっしたも、ねえよっ！！。」

「ん？」「クプ？」

リュウが訊ねると、漁師の男は怒りをあらわにした。リュウ達は何が何だかわからずにいるが、男はそのまま話を続ける。

「あの化物が、この島に現れてから、皆こうなっちまったんだっ
！！」。」

「化物？、何だ、それは？。」

「それは、「おおーい！！、また始まったぞあ！！」っ！ち
い、また始めたかつ！！」

突然声がして、周りが慌ただしくなった。リュウ達はなにが起こ
ったのかを、訊ねる。

「何だ？、一体何が起きたんだ？。」

「町の若え連中が、またあの化物に挑みやがったんだ！！」

そう言っ、漁師の男は他の連中と一緒に走っていった。

「何がどうなってるんだ？。．．．．．よし、俺達も行くぞ、
テン。」

「クピィー！！。」

リュウとテンは町の連中に着いて行つた。．．．．．そして
たどり着くと、そこは人であふれていた。その先には橋があり、ど

うやら隣の島に繋がっているらしく、橋の向こうで騒ぎになっているみたいだ。リュウは近くにいた人間に話しかける。

「なあ、一体何を騒いでるんだ?。」

「ああ?、あれを見てみる、あれを。」

「あれ?」

そう言われ、橋の向こうを見ると、

『ドガー————ン!—!』

「「「うぎやああああ!—!」」」

『ドゴ————ン!—!』

「「「うげえええええ!—!」」」

どうやら、戦いが起こっているみたいで、町の男達がなぎ倒されているようだ。リュウは、男達が戦っている相手を見ると、そこにいたのは。

「……………ネコ?。」

そこにいたのは、仁王立ちし、2メートルを超える巨体で、3等身ほどのネコだった。

『バコンッ!!!』

「ぐわあっ!!」 『ドサッ』

最後の一人がやられたが、ネコはさらに追い打ちをかけようとする。そして、男に攻撃を繰り出した。その瞬間、

『ガシンッ!!!』

「やめろ!、これ以上は無意味だ。」

「」「」「えっ!!?」「」「」

リュウはネコの攻撃を受け止めた。その光景に町の人間は驚いている。・・・その後、ネコは手を引き、リュウをしばらく見続けた、向こうの島まで去っていった。

「何だったんだ、あのネコ?。・・・それにしても、」

リュウは受け止めた右手を見つめる。その手は少し痺れていた。

「（たいしたパワーだ。単純な力なら、海軍本部中将にも匹敵するかもしれん。あのネコは一体、）」「そこのお方。」・・・ん？。」

突然、後ろから声をかけられるリュウ。振り向くと、そこには一人の老人と、その後ろに数人の町の人たちがいた。・・・

続く

第9話（後書き）

1話で終わらせるつもりだったんですけど、思ったより長くなりそうだったので、しばらく続きます。

第10話（前書き）

前回の続きです。

第10話

島に上陸したりリュウ達は、島の若者衆とネコの争いを止めたが、ネコが去った後声を老人に声をかけられた。

「あなた様に、お話があります。」

「その前に名を名乗ってくれ。俺の名はリュウ、流離人だ。こっちの空を飛んでる奴はテンだ。あんたは?。」

「これは失礼しました。わたくしはこのフタゴ島の町で市長を務めております、「フタンゴ」と申す者で「ホンマかいなあ。」っん、ん・・・貴方様に是非、ご相談したいことがあります、お声を掛けさせていただきました。」

「ふん、それで相談とは?。」

「少々話が長くなりますので、私の家まで来てはいただけませんか?。」

「そうか・・・まあいいか。テン、長い話になるみたいだから、お前は遊んできていいぞ。」

「クルツピ、クルツピ。」

そう言われて喜ぶテンは、笑顔で飛んでいく。そしてリュウは、市長らと共に市長の家に向かった。

「……しばらく島の上空を飛び回るテンは、ふと隣の島に目がいく。どうやら、先ほどのネコが気になってしまったようでありの島まで飛んで行ってしまった……」

「……一方、その頃リュウは、市長の家にとどり着き、話を聞く。」

「どうぞ、おかけ下さい。こちらは粗茶です。」

「これは、どうも。」

リュウは席につき、出されたお茶を啜る。

「あゝ……で、相談とは何だ？」

「はい。実はあのネコのことでの相談なのですが、……身勝手かもしれませんが、あなたにあのネコを、討伐していただきたいのです。」

「?。・・・それは何故?。」

「それは、あのネコがこのフタゴ島の食料を、独占してしまったているのです。」

「独占?、あのネコが?、それはまた何で。」

「はい、あのネコが戻っていった隣の島は、我々が食料生産の為に使っていたものなのですが、1年ほど前にあのネコが現れて、島を占領してしまったのです。」

つまり、この島は食料不足になっているのである。リュウはお茶を飲みながら、話を聞く。

「あの島は、我々の生活を支える基盤となっていました。当然、占領されれば、町に十分に食料が行き渡らなくなり、飢えに苦しむ者が増え、活気がなくなっていました。」

「なんとまあ、でも、お前達は何もしなかったのか?。」

「当然、我々はすぐに討伐隊を組み、ネコを退治しに行きましたが、全く歯が立ちませんでした。そこで私達は、海軍にまで要請しましたが、あのネコは海軍まで返り討ちにしてしまったのです。」

「たしかに、あのネコは強い。奴の攻撃を受け止めてみて分かったが、パワーだけなら海軍本部の中将クラスだ。並みの海兵じゃ、どうにもならんだろう・・・。」

リュウはあのネコのことを思い出す。何より、あのネコからは何か憎しみのようなものを、感じた。リュウは、しばし考え込む……。

「今は、漁業や輸入でなんとか補っていますが、ロクに蓄えることもできず、町から活気が消え、暴動も起こる始末です。……もう町は限界にきています！！、どうか私達の願いをお聞き入れてください！！。」

そう言つて、頭を下げた頼みこんでくる市長。しかし、リュウは市長の話を無視して、考え込んでいた。

「あのネコがいると、食料が調達し辛くなるなあ。それに……」

「あゝ、どうかあゝ。」

「ん？……ああ、討伐の話ね。……とりあえず、もう一度あのネコに会ってみることにする。そこまでするのは、何か理由があると思うしな。」

「そ、そんな悠長な。」

「問題さえ解決すれば、いいだろ。俺はなにより、あのネコのこと気がなるんだ。」

リュウはそう言うと立ちあがり、ネコの元え向かう。市長と町の住人も後に着いて行った。

．．．．．そして、リュウは橋の前に着く。その後ろには市長と数人の町の住人もいた。そのまま橋を渡り、隣の島の入り口までたどり着くが、そこには奇妙な光景が広がっていた。．．．それは。

「クピイー、クピイー、クピプウー!。」

「んゝ、んゝ。」

何故か、テンとネコが楽しそうにじゃれつき、遊んでいた。その光景を見た、市長を含む町の住人は、目を丸くし、啞然としていた。．．．．リュウはしばらく見守った後、二人に声をかけた。

「おい!、お前ら。何時の間にそんな仲良くなっただんだ?。」

「クピツ?」「!?!」

二人が振り向くと、そこには数人の人間であふれており、ネコは目つきを変え、警戒態勢に入るが、リュウは両手を上げ戦う意思はないことの、アピールする。

「さてさて、俺に戦いの意思はない。お前と話がしたくて来た。」

そう言つてリュウは、地面に座り込む。それを見たネコも警戒を解いた。ネコは相手に戦う意思はないことを、本能的に悟つたのであろう。そしてリュウは本題へと、入る。

「さて、……お前さんは、何故この島を占領したのだ?。」

そう訊ねると、ネコはしばらくリュウの顔を見つめた後、どこからか木の板とペンを取り出し、何やら書き始めた。そして書き終わったら、それを見せてくる。

「お前、字が書けるのかあ?。えーと何々、……」「この島に沢山の食料があるから、占領した。」、でも、それだけで占領したのか?。何か他に理由はないのか。」

そう言われるとネコは目をつぶり、何か思い詰めるような顔をし

た。すると、ネコから突然オーラのようなものが湧き出て、ネコが目を開いた瞬間、ネコが纏っていたオーラがリュウ達と町の人たちに降りかかってきた。

「こ、これはっ!？」

「うあ、うああ!!。」

「な、何だ!？」

突然のことで、大慌てする、市長と住人達。リュウはネコから、とくに殺気などは感じなかったため、あえて受けことにした。すると、視界が暗闇となりそれがしばらく続くと、だんだん光が灯してきて、全ての暗闇を灯した瞬間。

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・。」

続
く

第10話（後書き）

次でなんとか、この話を終わらせます。

第11話（前書き）

前回の続きです。この回でこの話は終わります。

第11話

ネコに、未知のオーラを浴びせられたリュウ達と市長を含めた町の住人は、視界を暗闇に遮られる。

そして、だんだん光が灯ってきてリュウ達の目に映ったものは。

「これは……………フタゴ島の町か?。」

そこには、フタゴ島の町が広がっていた。だがリュウは、その町が少しおかしいことに気づく。

「あれ?、さっき見た街並みとは違うようだなあ……………」

「こ、これはまさかっ!!」

「ん?。」

これを見た市長が、突然声をあげる。どうやら市長は何か知っているのだろう。市長はそのまま口ずさむ。

「これは、50年ほど前のフタゴ島の町です。ちょうどこの時代に、となりの島で食料生産が盛んになり、町が活気であふれました……………私がまだ幼かったころです。」

「ほお、ということは、これは幻覚か。あの猫が見せてるのかあ……でも、これが一体何の関係が「クプパイ」ん?。」

振り向くとテンが何かにゆびを指している。そのゆびの方向を見ると、そこにはボロボロやつれている、小さな子ネコが歩いていた。

「随分やつれてるなあ、この子ネコ。こんな小さいのに……て、あれ?、このネコ。」

リュウはこのネコを見て、ふと気付いた。この小さなネコがさっきまで対面していた、あのネコにどこか似ていることを。すると、市長がそのネコを見て何かを思い出す。

「このネコは確か、貨物船に紛れ込んでこの島にやって来たネコです。フタゴ島にはネコが居ませんでしたから、よく覚えています。」

そう、市長が説明すると、ネコが民家に向かって鳴き掛ける。おそらく食べ物恵んでもらおうとしていたのだろうか、必死に鳴き掛ける。すると民家から人が出てきて。

「何だ?。……て、汚^{きた}えネコだなさつさとどっか行けえ!!」
『ドカッ』

「ニヤッ!!」

蹴り飛ばされてしまった子ネコ。その後も、子ネコはいくつもの民家に向かつて鳴きわめくが、全く相手にされず、身も心もボロボロになっていった。・・・そして子ネコは先ほど、リュウ達が居た橋の上まで歩き、そこで倒れてしまった。

『グタ』

「ニヤ・・・ニヤ・・・。」

もはや、死を待つしかないだろうと、それを見ていた誰もが思ったその時、橋の向こうから小さな男の子が歩いてきて、子ネコの前にしゃがみこんだ。

「これ、あげる。」

「ニヤ?」

男の子は、手に持っていた木の実をネコに差し出したのである。それを貰い受けた子ネコは喜びの声を上げ、出された実をムシヤムシヤと食べる。

「中々いい子じゃないか。」

「いやはや、お恥ずかしい。」

「え？」

何故か市長が照れている。

「あれ、もしかして。」

「はい、この子は幼い時の私なんです。」

「ほお、それはなんとも・・・それより、あの子ネコが食べてる実、どこかでみたような「ニヤアツ!!」ん!?、どうした!?。」

実を食べた子ネコが突然、悲鳴を上げもがき苦しむ。・・・そして。

『バタツ!』

子ネコはバタツとあわを吹きながら倒れ、そのまま生き絶えてしまった。・・・すると、リュウ達の辺りが真っ暗になり、光が差すと元居た橋の上に立っていた。

「・・・あの実を食べて死んだのか。でもあの実はたしかあ・・・」

そう言つと、リュウは荷物から書物を取り出し、パラパラとめくる。

．．．．．そして。

「やっぱり。」

《くバケバケの実く。この実を食べた者は、死んだ後、化けて出ることが出来る。死んだ時の私念が強ければ強いほど、食べた者の強さが増す。》

リュウが取り出した書物は悪魔の実の図鑑で、その中に幻覚で見た子ネコが食べた実と同じ形をした悪魔の実が記されていた。．．．
・そしてリュウは、本をしまいネコに向かって叫ぶ。

「お前は、悪魔に実を食べたあの子ネコが、化けて出たものである!。」

『コク』

ネコがうなづく。

「そしてお前は、あまりに不味いものを食べて、強い私念を残して死んでしまった!。」

『コク、コク』

さらに、うなづく。

「その私念が悪魔に実の力を発動させ、お前は「化けネコ」になり、うまい食べ物を求め、この島を占領したのだあ!。」

『ピンポン、ピンポーン』『パンツ!、パーンツ!』

どこからだったのか正解音が鳴り、さらにネコがどこから出したのか、クラッカーを鳴らす。

「なるほどお、たしかに悪魔の実は物凄く不味いからなあ。あ

んな瀕死の状態で食べれば、ショック死してもおかしくないな。」

「クプウ、クプウ。」

テンは、ネコの背中をなで、励ました。・・・そこで、市長が。

「何と、不憫な死にかたをしてしまったのだ。ううう、」

「」「」「つて、あんたがとどめを刺したんだろうがっ！！！」

「」

涙を流しながら悲しんでいる市長に、集まった町の住人全員がツッコむ。

「つまり、島を占領したのは町の住人にたいしての復讐もあつた訳かあ。」

『クイ、クイ』

リュウの言葉にネコは首を横に振る。そしたら、また木のプレートを取り出し、字を書き、リュウに見せる。

「何々？、復讐なんて、今はもうどうでもいい。町の連中が飢えに苦しむ姿を見て満足した。今はただ、うまい食い物が食べたい

だけだ。・・・なるほど。」

理由が分かり、納得したリュウ。だが、リュウはあることに気づき、ネコにさとす。

「でも、このままではお前の願いは叶わないんじゃないか?。」

「?」

リュウの言葉に、ネコは首をかたむける。

「だって、この島で作られているのは、あくまで食料にするための食材だから、ちゃんと「調理」ちようりしないと、美味しくいただくことはできないぞ?」

「・・・・・・・・!!!!?っ」

ネコはしばらく沈黙した後、目を見開いて頭をかかえる。どうやら、己が侵していた過ち?に気づき、ガクツと肩を落とす。・・・そして、

『スタ、スタ、スタ、スタ、・・・・・・』

ネコは、リュウ達の横を通り過ぎ、何処へと去っていつてしまった。

「「「「.....」」」」

その場にいた者全員が沈黙していたが、ここでリュウが一言、

「見事、解決した!!。」

「クピイ!!」

「「「ドテーーーーーッ!!。」」」

高らかと宣言するリュウ達に、町の住人は全員ズッコケる。こうして、このフタゴ島でのネコ騒動は、いともアッサリ、無事に解決したのである。.....

それからしばらくしてリュウ達は、市長ら町の住人に、一樣、お礼ということで沢山の食料を貰い受け、フタゴ島を後にし、海に出た。……そして、海に出てしばらくした後、リュウは貰った食材で飯を作るためキッチン向かったが、そこには。

『コッ、コッ、コッ、コッ、コッ……』

「……………何で、ここにいるんだ？」

「ん。」

そこには、先ほど去っていったあのネコが、包丁の音を立てて料理を作っていた。リュウに声をかけられたネコは、ふと、本を取り出しリュウに見せる。

「何だ？、《マル秘、おいしい料理の作り方！》……………これがどうした？」

そう言われると、ネコはまたまた木のプレートを取り出しリュウに見せる。

「え〜と何々、あの後、道端で偶然この本を拾い、読んでみたら度ハマりしてしまった。美味しい飯を食べるには自分で料理を作る

のが一番だと思い、自分は一流の料理人^{コック}になるために世界を回ることにした。・・・それで、俺の船に乗り込んだと?。」

『コク、コク。』

頷く、ネコ。

「んゝ・・・・・・・・ま、いつか。コックは前からほしいと思ってたし。」

「んーーーー!~!」

「クピ、クピイー!~!」

喜ぶネコ。テンも仲良くなったネコが、仲間になったことで大喜びである。

「にしても、お前グルメになってるなあ。・・・・・・・・よし!、今日からお前の名前は「グルメネコ」だ!。では早速、祝いの為の料理を作ってくれ。」

「んゝゝゝ。」

リユウに言われて笑顔で取りかかる、ネコ改めてグルメネコであった。・・・・・・・・こうして、また変な仲間をもったリユウは世界を

流離うのであった。
・
・
・
・
・
・

終わり

第11話（後書き）

今回の話は、パロディのつもりで書いてましたから、内容はこもっていません。後、もう一人くらい仲間を増やしたいと思っています。

「キャラクター紹介」(前書き)

キャラクターの一人を紹介します。

くキャラ紹介1く

名前

テン （注意、Dr・スランプ アラレちゃんのガッちゃんの
パクリキャラです。）

遠い昔に空島から追いやられた亜人種の子孫で、母親と共に風の
帯にある、世界政府が管轄する島に流れ着く。母親は流れ着いた時
に死別していて、テンは島にいた政府の研究者達に、強化人間に改
造される。徹底的に改造されたため、体が成長することは無くなっ
た。

見た目、特徴

赤子に羽が生えて、自由自在に空を飛ぶことができ、電撃を放つ
ことができる。そして、何でもカジカジ食べる。

（ガッちゃんから、触角をとった感じです。）

性別

一様、女ということにしておきました。

強さ

海軍本部で例えると、少将以上、中将未満。ただ体の頑丈さだけは、大將クラス。

くキャラ紹介1く（後書き）

完全なガッちゃんです。どうしても出したいと思ったんです。ク
レームは受け付けません。

第12話（前書き）

前回の話から、1年ほど経った頃の話です。この時リュウは20歳。

第12話

グランドラインのとある海の上で、戦闘が行われていた。一つは海賊船。もう一つは、

「そらあっ!」 『ドカッ!!』

「ぐうわあっ!!!!」

「クピーー!」 『ビビビビビッ!!!』

「ぎよわあああああ!!!!」

「んっ!」 『ドスッ!!!』

「のわああっ!!!!」

リユウ達である。戦闘と言っても、リユウ達の一方的な虐待みたいになっているが、これには訳がある。

1時間ほど前・・・・・・・・

「んゝ・・・・・・・・拙いな。」

真剣な顔をして、リュウは何やら悩んでいた。・・・・・・・・その理由は、

「これは拙い。預金の底が見えてしまった。最近、これといった収入がなかったからなあ。」

どうやら、残金が残り少なくなっていたようだ。グルメネコが仲間になってから、食費に関しては節約出来ていた為、ここ数日はもっていたが、それも限界に来ていた。

「クプ、クプウ。」

それを見たテンが、リュウを慰める。

「慰めてくれるのか、テン。だがこのままじゃ、正直言ってヤバ『ドカーン!!』い、って何だ！砲撃!?!。」

リュウは外にしてみると、前方から海賊の旗を掲げた船が迫って

きていた。そして海賊船は、リュウ達の船の横に止まり、船長が現れる。

「があははははは！！、俺の名はガンデだあ！！。今すぐ金品、食料をよこせ！！。」

「うるさい奴だ。ちなみに食料はあるが、金品はないぞ。それから、高らかと名乗ってたが、お前賞金首か？」

「気の強いやつだなあ、これを見ろっ！！。」

ガンデは自分の手配書を見せつける。

「何々、「略奪のガンデ、懸賞金5千200万ベリー」かあ、略奪ねえ……………」

リュウは、見せつけられた手配書を見て、何かを考える。

「略奪と言うことは、さぞたくさん金品を持ってるんだろなあ。」

「ぐああはははは、おうよ！！。村、町はもちろん、民間船、海賊船も手当たり次第に略奪してやったぜえ！！。てめえも命が惜しければ、さっさと出せるもん全部だしなあ！！。」

「いや、それよりも取引をしよう。」

「何!？」

リュウは何かを考え付いたようで、相手船長に取引を持ちかける。

「実はこちらは、食料はたくさんあるんだが預金が残りすくなくてなあ。そこでだ、こっちの食料の一部とそっちの金品の一部を交換てのはどうだ?。」

この発言に、相手船長は激怒する。

「ふざけるなっ!!、何で俺がそんな取引に応じなきゃならねえんだっ!!」

「そうかあ?、破格の取引だぞ。俺は金品を手に入れて、お前らは食料を手に入れ、さらに五体満足無事に帰れるんだから。」

「っ!!、ふざけるなあ!!」 『パンツ!』

怒り狂った相手船長は、リュウに向かって手に持っていた銃を発砲した。だが、リュウは、

『シュパッ』

「なっ！？、何いっ！！！」

リュウは飛んできた銃弾を、人差し指と中指で挟んで受け止めてしまった。そしてリュウは、その状態のまま、相手船長に口ずさむ。

「・・・交渉は決裂か。ならば「クピィー！！」って、え！？。」

『ビビビビビビビビビッ！！』

「ぎよああああああああ！！！」

リュウが手を出そうとしたその時、テンが横から出てきて電撃を、相手船長にくらわしてしまった。一樣、カッコウ付けようとしていたリュウはテンに注意をする。

「コラコラ、テン。今のは俺がやる所だろお。」

「クピッ」

リュウの注意に、テンはテヘっとした表情で返す。だが、そうしている間にさらに、

『バコンッ！！』

「のあああつ！！！」

「つて、おおい！」

今度は、グルメネコが相手の船に乗り込んで、一足先に戦っていた。相手の吹き飛ばした後、グルメネコはリュウに向かって、親指を立てる。

「全くどいつもこいつも……ま、いつか。じゃ、始めようか！」

……てな訳で、今に至る。船長が真っ先にやられてしまった為、海賊達はロクに連携がとれず、一方的にやられるはめになっているのである。……そして、ある程度たった後、

「頼むっ！！、助けてくれっ！！。何でもするから、命だけはっ！！」

勝ち目が無いとようやく分かった海賊達が、さっさと命乞いをしてきた。

「なら、金品を半分ほど分けてくれ。そうすれば、これ以上手は出さない。」

「は、はいっ！！。ただいまっ！！」

そう言っただけで海賊たちは、せつせと金品を明け渡し、さっさと逃げて行った。……そして、海賊達が去った後、リュウは貰った金品を確認する。

「それにしても、あいつらは随分な数の略奪をしたんだなあ。貰ったのは半分だけだけど、これを全部課金したら3億ベリーぐらいはするなあ……。」

金品の額に、素直に関心するリュウであった。

「さて、ここらでミルクを一本「クプ、クプウ！」ん？、どうしたんだ、テン。」

テンが外で騒いでいるみたいで、リュウは確認しに行く。そして
らテンが、何やら指を指していて、その方角を見ると、島があった。

「島かあ、ちょうどいい。あの島で休むか。．．．ん!？」

リュウは何か気づき望遠鏡を手にとって確認すると、島の浜辺
に、世界政府の旗を掲げた、大型船があった。

「政府の船?。何故こんなところに．．．。」

リュウは政府の船を確認していた、次の瞬間

『ズバンッ!!!』

「何っ!？」

突然、政府に大型船が真っ二つになった。

「一体何が起きた!」

リュウは突然、政府に船が真つ二つになったことに驚き、表情が変わった。しばらくそれを見ていた後、

『ズビュンッ!!!!』

島から、何かが放たれた。しかもそれは、どんどんこちらに近づいてくる。

「あれは、………マズイっ!!」「粒子拳!!」

リュウは拳の形をした粒子を、迫ってくるものに向かって繰り出した。そして、衝突した次の瞬間。

『ドゴーーーーー!!!!!!!!!!』

「なあっ!!」

「クピッ!!」

「んーーーー!!」

物凄い衝撃がリュウ達を襲い、船が大きく揺れる。

「二人とも大丈夫か!?!」

「クプウ」

「ん」

どうやら二人とも無事だったようだ。二人の無事を確認したりリュウは、真剣な表情になり、島を見つめる。

「（今は間違いなく、斬激波だった。それも、物凄い威力だ。あまともに受けていたら、一溜まりもなかった。）……………あの島、何かがいるな。……………行ってみるか。」

リュウは、あの斬激波を放った者を確認するため、島へと向かった。……………

続く

第12話（後書き）

この話は、3話以上続くと思います。

第13話（前書き）

前回の続きです。

第13話

リュウ達は、先ほど斬激波が放たれた島に上陸する。その島は、島のほとんどが、森林や山で埋まっていた。

「島自体もかなり大きい上に、険しいジャングルが広がっているな・・・（それにしても、あの斬激の威力、下手をしたら、海軍大将クラスの使い手かもしれない。・・・二人を連れていくのは、危険だな。）」

「クピッ！」

「ん？」

リュウは、さっきの斬激波を放った者について考え込み、テンとグルメネコは船に残して行こうとした。だが、そんな中、テンはリュウの肩にピターッと張り付く。

「クプ、クプウ。」

「何、早く入ろうって？、お前は船にいる。今回は、少々危険かもしれない。」

「クプウーッ！！」

そう言われると、テンは激しく駄々をこねる。リュウは、テンの身を案じて言ったことだが、好奇心旺盛のテンには、それは通用しなかった。テンは、さらに激しく駄々をこね始めた。

「クプ！クプ！クプ！クプ！クプ！クプ！クプ！クプ！ク
プ！クプ！クプ！クプ！」

「あああああ、分かった分かった、連れてくよ。．．．ただし！、勝手な行動はするなよ。」

「クプパイー!!」

「全く。・・・おい、グルメネコ。お前は船に残っててくれ。船に何かあったら困るからな。」

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ \vdots \\ \vdots \\ \circ \\ \perp \end{array}$$

了承したグルメネコは、船で留守番。そしてリュウは身支度した後、テンと共にジャングルへ入っていった。

・・・・・・・・・・ジャングルに入ってから、数時間が経った頃。

「ほっ、ほっ、おっと！」

リュウは未だにジャングルの中を駆けていた。テンはリュウの肩にしっかりとしがみ付いている。それからしばらくして、リュウは一息つくため、立ち止る。

「ふう〜、随分険しいジャングルだなあ。並みの人間なら、7回は遭難できる。」

「クプウ〜。」

「ん？、心配するな。俺は遭難なんぞしない。・・・・・・・・それにしても、この入り乱れたジャングルの中をかなりのペースで走ってるんだが、・・・・・・・・（誰かが、後を付けてきている）」

リュウは、何者かが後を付けてきていることに気づいており、ずっと警戒をしていた。そして、

「クロックアップ」

「！！！？」

クロックアップを発動させたリュウは、その場から一瞬にして消える。それを見ていた追跡者は、動揺し、姿を現した。

「・・・・・・・・・・ど…こ?。」

「子供?・・・しかも、少女か。」

リュウは現れた少女を、木の上に隠れて見ていた。年齢はおそらく10歳前後、髪は短髪で裾の短い着物をきている。・・・だが、何より気になるのは、

「・・・・・・・・瞳が、赤い!。」

そう。その少女は、赤い瞳をしていた。・・・それからしばらくすると、少女は走り去っていく。リュウは相手に気づかれないように追跡をした。しばらく追跡すると水辺にたどり着き、少女は給水をしていた。リュウはそれを、離れた場所で見ている。

「子供の割には、ずいぶん高い身体能力だ。だが、斬激を放ったのはあの子ではないな。他にまだ居るはずだ。・・・テン、もう少し追跡するぞ・・・・・・・・って、え!?いない。」

リュウは肩に張り付いていた、テンがいないことに気づく。そし

て周りを見渡してみると、

「クピィ！」

「……だ…れ。」

テンは、追跡していた少女の元にいた。

「何をやっ取るんだ、あいつは。全く……ん！？、誰かくる！」

誰かが近づいてくることに気づいたリュウは、身を潜める。そして現れたのは、背が高く長髪で、長い着物を着る男であった。そして、腰には刀を身につけていた。顔は編み傘をかぶっていてよく見えないが、リュウは何となく理解した。

「……この男だな、ただ者ではない。」

リュウは、斬激を放った者がその男であると何となく気付いた。歩き方、雰囲気、何より全くと言うほど、スキがない。男は静かに、テンと少女に歩み寄った。

「おやおや、どこに行っただかと思えば、こんな所で遊んでいたの

ですか。」

「!?!?・・・父。」

「クピッ?」

「これはこれは、可愛らしい赤子ですねえ。・・・・そこに隠れている方、あなたのお子ですか?。」

「!?!?」

男は、リュウがいる木陰に向かって話しかけてきた。さすがのリュウも、これには驚いていた。リュウは、潔く姿を現す。

「気づいていたのか。これでも上手く隠れていたつもりなんだが。」

「いえいえ、貴方の隠れ方は完璧でした。風下に居て、気配も全く感じませんでしたから。ただ何となく、そこに居ると思っただけです。」

「感、と言うやつか。・・・・たしかにそいつは俺の連れだ。テン、こっちに来い。」

「クピィ」

そう言われたテンは、リュウの元に戻り、肩に乗る。

「さて、自己紹介をしておこう。俺はリュウ、流離^{さすらいびと}人だ。そして、こいつはテン。親子ではないが、共に旅をする仲間だ。」

「クピプウ！」

「これはご丁寧に、どうも。ならばこちらも。」

そう言うと、男は編み傘を取る。すると男には額に、角が生えていた。目は閉じているが、それ以外は何の変哲もない。

「私の名はシズナ、この角を見て驚いているかもしれませんが、私は鬼族と言う、亜人なのです。そして、こちらはシグレ。角はありませんが、私の実の娘です。」

「よろしく。」

少女は特に表情もなく、ぎこちない喋りで挨拶をする。そして、互いのあいさつが済んだ後、リュウは本題に入ろうとしたが、それより先にシズナが口を開ける。

「一つお尋ねしたいのですが、・・・あなた方は政府の人間ですか?。」

「ん? いや、俺たちは流離。まあ、冒険家とも思ってくれ。航

海の最中にこの島を見つけてなあ、そしたら突然、この島から放たれた、巨大な斬激波に襲われ、確認しにきたのだ。

「そうでしたかあ。これは大変、申し訳ありませんでした。てつきり政府の船だと思い込み、斬激を放ってしまったのですが、返す言葉ありません。」

シズナは、自分がやったとあっさりと宣言し、リュウ達に深く謝罪する。リュウは、シズナが気になる発言をしたにので、それを尋ねる。

「政府の船だと思ったってことは、お前は政府に狙われているのか?。」

「はい、少々事情がありまして・・・それよりも、あなたはあの船に乗っていたということは、私の斬激を防いだのは、あなたですか?。」

シズナは、突然訊ねる。

「ああ、確かに俺だ。それにしても、物凄い威力の斬激波だったな。まともにくらってたら、船ごとコナゴナだったぞ。お前は相当の使い手だなあ。」

「いやいやお恥ずかしい。私の本気で放った斬激を、いとも簡単に防いだ貴方こそ本物の使い手ですよ。・・・・・・そうだ!、実

はあなたに頼みたいことがあるのですが。」

「ん？、何だ。」

突然、シズナはリュウに頼み事をしてくる。シズナは少し真剣な表情になり、静かにテンとじゃれあっている娘に顔を向けた。・・・そして。

「シグレを、・・・私の娘を引き取ってもらいたいです。」

続く

第13話（後書き）

まだ続きます。

第14話（前書き）

前回の続きです。

第14話

「実は、私の娘、シグレを引き取ってもらいたいのです。」

「……どういう意味だ?。」

突然、娘を引き取ってくれと頼み込むシズナに、さすがのリユウも頭を悩ませる。リユウはその意図を尋ねると、シズナはそのまま返してくる。

「別に、そのままの意味ですよ。先ほどもお話したとおり、私は世界政府に狙われています。私とあれば、あの子に危険が及んでしまいます。だから、引き取ってもらいたいのです。」

テンと遊んでいるシグレを見ながら、シズナはそう答える。だがリユウは、その発言によってさらに、謎が深まり、シグレに聞いたです。

「余計に分からんな。だいたい、お前ほどの実力があれば、あの子を守り抜くこともできるだろう。」

「それは、」

リユウがそう問いただし、シズナが答えようとした、その時。

『コトッ』

「「!？」」

大きな岩が、テンとシグレに向かって落ちてきた。

「まずいつ!。クロッ『ビュンッ!』クアッ、!？」

リュウがクロックアップを発動させるよりも早く、シズナが動き出し、そして。

「きええい!!」 『ズバッ!!』

「何と!。」

シズナは落下してきた大岩を見事、空中で真っ二つにした。・・・
・だが、

「クプウ!!」

「「なっ!!」」

真つ二つとなった大岩の片割れが、シグレに向かって落ちていくことに、二人はテンの叫びで気づいた。

「シグレえー!!」

「クロックアップ」!!」

リュウはすかさずクロックアップを発動させ、シグレを助ける。

「ふうゝ危なかったなあ。」

「シグレっ!!」

娘が無事だとわかったシズナは、慌ててシグレを抱きとめた。その顔には涙さえ流れている。

「よかった!、本当に無事でよかった!。」

「父、…だいじょうぶ。」

娘と無事を確認し合うシズナの姿を見たリュウは、自然に笑顔となった。だが、ここまで娘の身を案じている姿を見て、何故引き渡そうとしたのか、リュウは再びシズナに問いただす。

「そこまで娘が大事なら、何故俺に引き渡そうとする。ハッキリ言って理解ができない。」

「それは、……うっ！」

「ん？。」

突然、様子がおかしくなったシズナ。リュウはどうしたのか訊ねようとした、次の瞬間。

「ぶうはっ！！」

「なっ！？」

シズナは突然、血を吐き倒れこんでしまった。リュウはすぐに駆け寄り、手当をする。

「くっ、ここじゃだめだ！。おいシグレ、この辺に休められる場所はないか！？。」

「家が…ある。」

「そうか、なら案内をしてくれ！」

「うん!。」

シズナを抱えたりユウは、シグレの案内で家に向かった。・・・
・そして、見渡しのいい丘の上にある小屋にたどり着き、その中で
シズナの手当てをした。

「とりあえず、手当てはした。それにしても、肉体自体がかなり
弱まっている。・・・今は寝かせておくしかない。」

「父・・・」

「クプウ」

父親の心配をするシグレを、テンが励まし続ける。とにかく、今
は休ませることに専念させるため、シズナを布団に寝かし付けた。
・

・・・・・・・・数時間後、もう日が暮れてきたところに、シズナは目覚めた。

「うつゝ、うつゝ・・・ここは？」

「目が覚めたようだな。」

「リュウ殿。」

シズナは自分の家で眠っていたことに気づく。そしたら、シグレが眠りから覚ました父親の元に駆け寄ってきた。

「父、だいじょうぶ？。」

「シグレ、心配をかけてしまいましたね・・・」

娘の頭をなでるシズナ。しばらくそうしていると、リュウが口を開いた。

「体が酷く弱っている。一度島を出て、ちゃんとした医者に見せた方が「それはできません。」「何!？」」

リュウの意見を、シズナは真っ先に否定した。そしてシズナは、自分の体について話し出す。

「私の体は、すでに限界に近づいています。おそらく後、数日の命でしょう。」

「……それが、娘を引き渡そうとした理由か?。」

「はい、そんなところです。」

シグレを引き渡そうとした理由を、要約聞くことができたリュウ。たしかに政府に狙われている身で、唯でさえ危険な境遇にいるのに、自分の命が付き掛けているとすれば、娘の身を案じて引き渡そうとするのは、仕方がないとも言える。だがリュウは、どうしても気になることがあり、それをシズナに訊ねることにした。

「事情はだいたい分かったが、それ以前に、何故お前は政府に狙われているんだ?。政府に恨みでもかうことをしたのか?。」

「それは、私の今に至る経歴から説明しないといけません。」

シズナは体を起こし、正座の状態になった。リュウも座り込み、ゆっくり話ができる状態になる。そしてシズナは真剣な表情になり、口を開いた。……

「私はかつて、政府に属していました。」

続く

第14話（後書き）

まだ続きます。

第15話（前書き）

前回の続きです。

第15話

「私は、かつて政府に属していました。」

「政府に!？」

「はい。」

リュウは、シズナが政府に属していたことに驚いた。何故これほどの男が世界政府にいる必要があったのか、リュウはそのことを説いた。

「何故、政府なんかに。」

「・・・わたしたち鬼族は、過去数百年に渡り人間と対立してきました。人間とはどうしても相容れない事情があったからです。」

「その事情とは?。」

そう尋ねられたシズナは少し口ごもるが、一呼吸し改めて事情を話す。その事情とは

「我々鬼族は、人間を食さなければ、生きて行けないのです。」

「!？」

人間を食すと言った発言にリュウは驚き、額にしわを寄せた。シズナはそのまま話を続ける。

「そんな鬼族を、人間はけして受け入れてはくれませんでした。当然ですね。自分が食べられるのではないかと思えば、ゾツとしてしまっしょ。」

「確かにな。」

「そんな訳で、人間とはずっと対立していきました。さらに数が少ないですが、力に優れていた鬼族を人間は恐れ、積極的に討伐をしてきたのです。」

己の一族を語るシズナの表情は、どこか悲しみに満ちていた。

「以下に力が優れていても、圧倒的に数で負けてた鬼族は、徐々にその数を減らして行きました。今ではもうほとんど生き残ってはいないでしょう。・・・私の両親も、私が幼い頃に死にました。」

「身勝手な話だ。」

リュウは自分達、人間のことで呆れている。身内同士で馬鹿みにに殺し合いをするくせに、相手が他種族だとすれば、もはや害虫としか思っていない。自分達は、豚や牛など好きなだけ殺して食っ

ているくせに、自分達が食われるのは理不尽に不定する。身勝手ではないと。

「私も人を食らってきました。そしてその度に襲われ、力を振るってきましたが、ある時、政府が私に一つの提案をしてきたのです。」

「提案？」

「我々の為に力を振るってくれば、好きなだけ人間を食らっても構わないと。」

「……人間を餌にして、鬼を操ろうとしたのか。……愚かな。」

世界政府ならやりそうなことだろう。やつら自分達の為になるなら、どんなことでもする。おそらく鬼族の驚異的な戦闘能力を支柱に収めたかったんだろう。

「かつての私にとって、その提案はありがたい物でした。いくら人を食らっても、罪に問われないのですから、私はその提案に乗り、政府に属しました。」

「なるほど、……それが何故、政府に狙われることになったんだ？。」

政府に属した経歴をしつたリュウは、最も知りたい事情を聞き出す。そしてシズナは静かに本題へと話しを進めた。

「私が政府に属してから数年たった頃、任務で金獅子きんじしが率いる海賊大艦隊に潜入捜査をしました。」

「金獅子きんじしだっ！！」

金獅子きんじしの名を聞いて、激しく驚くリュウ。ま、当然ではある。金獅子きんじしはかつて、新世界にて最大勢力を誇っていて、かの白ひげと動揺、我が船長であったゴール・D・ロジャーをもつとも苦しめた男の内の一人であったのだから。それに、幼いころまじかで船長と金獅子きんじしが戦っていた所をこの目で見ていたリュウにとっては、その實力はよく分かっていた。

「とんでもない男の元に潜入したな。まあ、お前ほどの實力があったからこそできた任務なんだろうが。」

「はい、金獅子きんじしは古代兵器について色々嗅ぎまわっていたので、それについての潜入捜査だったのですが、私が政府のスパイであることに気づかれてしまい、激しい戦闘の後何とか脱出に成功しました。」

「金獅子きんじしを相手にたいしたものだ。」

リュウは金獅子きんじしと対峙し、なおかつ生き延びたシズナに、心の底

から関心していた。

「もちろん唯ではすみませんでした。金獅子きんじしとの戦いによりかなりの重症を負わされ、船を脱出したはいいですけど、ロクに体力が残っていませんでした。何とか近くの島までたどり着きましたが、着いた途端に私は倒れこみました。もはや死を待つのみだと思っていましたが、ある女性がわたしを救ってくれたのです。」

「女性？」

「はい、その女性の名はヒスイ。後の、私の妻であり、シグレの母親です。」

話によると、シズナはその女性、ヒスイに発見されて、手厚い看護を受けたらしい。シズナはヒスイについて、おもむろに語り出す。

「ヒスイは、障害によって体の弱い女性でしたが、それを思わせなくらいに明るく優しい女性でした。鬼族である私を見ても気味悪がることもせず、逆に私を見て羨ましいとまで言ってきたのです。」

「羨ましい？」

「ええ、「そんな強くてたくましい体、私もほしいな。」、と。」

妻について語るシズナは、どこか笑顔でいた。愛する妻についてなら、幾らでも語れると言ったところだろう。シズナはそのまま話を続ける。

「私はそんな妻に、心を惹かれました。やがて我々は恋に堕ち、結ばれました。そして私は、自分に誓いをたてたのです。……もう、けして、……人を食べないと。」

「……それが、今、お前を死の淵に追いやっている理由か。」

「……はい。それから私は、戦死したことにして政府から抜けたのです。やがて、子供に恵まれ、シグレを授かりました。……あの時が一番幸せでしたよ。」

思い出に浸り、テンと遊んでいるシグレを見つめているシズナ。その表情は笑顔ではあったが、どこか悲しみにも満ちていた。

「ですが、そんな幸せも長くは続きませんでした。」

「政府にかぎつかれたか。」

「はい、我々はひっそりと暮らしていましたが、鬼族の象徴でもある角と赤い瞳は、どうしても目立ってしまいました。そこから噂が流れ、逃亡生活が始まってしまったのです。」

「では奥さんは、」

「ええ、元々体の弱かった妻は過酷な逃亡生活に絶えることができず、生き絶えました。・・・私は妻と約束をしました。何としても娘だけは、シグレだけは守り抜くとおつ!!。」

「そう言うことが。・・・」

事情を知ったリュウは要約、理解することができた。政府に狙われている理由、死の淵に追いやられている理由を・・・。

「それからは、できるだけ目立たないように生きて行きました。角は切り落としても再生してしまいますが、瞳を閉じ、幸い人間の血が混ざっているためシグレには角が生えなかったので、今まで生きながらえて来ましたが、それも、もう限界です。」

「だから娘を俺に引き渡そうとしたのか？」

「・・・はい。私はもうシグレを守ることができません。だから、あなたにお願いしたのです!!。「流離のリュウ」と呼ばれる、あなたの強さを見込んで!!。」

「っ!?!。・・・俺を知っていたのか!?!。」

リュウは、シズナが自分の正体を知っていたことに驚いた。

「貴方の噂は、よく耳に届いていました。若くして2億の懸賞金

が付き、王下七武海の候補にまで挙がっていた、その実力を。」

「・・・よくお尋ね者である俺に、頼もつとしたなあ。もし俺が
とんでもない悪党だったらどうするつもりだ?。」

「それは、あの子を見ればわかります。」

シズナは、娘と遊んでくれている、テンの姿を見て答えた。テン
を見て気づいたのだろう。あの子は他人であるはずのリュウを心か
ら慕っている。そして、その心を受け止めてくれる、器量と度量、
何より優しさが、リュウにはあると言うことを・・・。

「あなたにならば、シグレを安心して任せることができます。お
願いしますっ!!、どうか娘を引き取ってもらいたいのですっ!!」

頭を下げ、土下座をするシズナ。リュウはそのシズナの姿を見て、
しばし考える。・・・そして、

続く

「
・
・
・
・
・
・
断る。」
」

第15話（後書き）

次回、クライマックス・・・いけるかなあ。

第16話（前書き）

前回の続きです。

第16話

娘を引き渡そうとするシズナの事情を、要約知ることができたリュウ。そして、改めてリュウに土下座し、娘のことをお願いしてくるシズナに、リュウは……

「……悪いが、断る。」

「……何故。」

リュウはシズナの頼みを断った。事情を知り、娘を手放そうとする理由も知ったリュウだが、どうしても納得できないことがあった。

「そんなことをしなくても、この問題はもっと簡単に解決することが出来るはずだ。……そう、シズナ。お前が人を食らえば済むことだ。」

「……」

そう、リュウはそれが納得できなかった。幾ら誓いを立てたとは言え、愛する娘の為ならば、人を食らうのもやむなしと考えなかったのか？。そうすれば死ぬこともなく、これから先も娘を守り続けることができるはずなのに……。だが、シズナは

「……それは、出来ません。」

「何故？」

その理由を聞くリュウ。……すると、シズナは

「どうしても、……どうしてもできないんですっ！……！」
『シャキンッ！』

「っ！……？」

突然、眼を見開き、刀を抜くシズナに、リュウは表情が鋭くなり警戒態勢に入る。傍にいたテンとシグレは突然のことで、その場から動けないでいる。

「この願いを引き受けてくれないのであれば、私は今ここで、貴方を切り伏せますっ！……！」

「……、何て身勝手な理屈だっ！……！」

「お願いですっ！……、どうか娘のことを引き受けてくださいっ！……！」

刀を抜いた状態で、リュウに頼み込むシズナ。だがそれでもリュウの答えは、変わらなかった。

「……断る!!」

「きえええいつ!!」 『ズバツ!!!!』

「くっ!!」

するとシズナは、リュウに切りかかり、壁を切り裂いた。リュウは小屋の壁をぶち破り、外にでるがシズナは追撃してくる。そして二人は、正面を向いて対峙することとなった。……その状態がしばらく続くと、リュウは先ほどの事情を聞き出そうとする。

「何故、人を断つことをやめない!。娘を守る為なら、人を食らうことに、ためらいなどないだろう!!。そんなに自分の意地が大事か!?。」

「私には、……私にはこうするしかないのですっ!!」 『ギラッ』

「っ!!!?!」

その瞬間、シズナから物凄い殺気が放たれた。それを受けたリュウはゾクリッとする。刀には明らかに覇気が込められていて、シズナは完全にリュウを殺そうとしていた。

「これが最後のお願いです。どうか、娘を引き受けてください。」

「そんな身勝手な理屈が、通用すると思っているのか!？。俺の答えは変わらない!!。(手加減できる相手ではない。本気を出さねば、こちらがやられる!)」

「そうですか。・・・ならば、いきますっ!」

二人は完全に戦闘モードに入る。それを遠くから見つめているデーンとシグレは、心配そうな顔をしている。・・・そして、

『ズドンッ!!!!!!!』

・・・勝負は、一瞬であった。相内にも見えるが、シズナの刀はリュウの首の横を通り、そしてリュウの拳が、シズナの腹部を突いていた。

「ぐうはあっ！！」

「「粒子激」」

「粒子激」、クロックアップを腕だけに発動させ、粒子を帯びた拳を超高速で繰り出す技。相手が光と同等、もしくはそれ以上に早く動かない限りけして回避するのは、不可能である。

『ドサッ』

拳を受けたシズナは、倒れこんだ。リュウは右肩に痛みを感じ、手で抑える。

「（くっ！右肩を少し切られたかあ。本気を出さなかったら、間違はなく俺がやられていた。）」

「う、う、み、見事…です。」

「お前は体が弱っていた為、踏み込みがわずかに遅れたんだ。もし、万全の状態だったら共倒れになっていただろう。」

「ふふ、金獅子^{きんじし}以来ですよ。こんな戦いをしたのは・・・」

シズナは苦しみながらも笑顔で答えた。もはや助かることはないだろう・・・だが、リュウはどうしてもこれだけは聞きたかった。それは、

「死ぬ前にこれだけは答える。何でそこまで、人を断つことに拘る！。己の意地が、娘よりも大事とでも、言うの「そうではありませんっ！！」か、！？。」

「私は、・・・私には、娘の傍にいる資格がないんです！。」

「・・・どう言うことだ？。」

リュウの言葉を力いっぱいに否定したシズナは、ふと、開いた眼でシグレを見た。・・・そして、苦しみながらも語り出す。

「私は、妻が亡くなった後も、まだ赤子だったシグレを連れ、逃亡生活を続けていました。心の支えであつた妻が亡くなったことで私の心は少しづつに削れていきました。するとある日、赤子であつたシグレを見て、こう思ってしまったのです。・・・「美味そうだ」と。」

「!？」

「私は!、・・・私は一瞬とは言え、シグレを自分の娘ではなく、美味そうな餌と思ってしまったのですっ!!。・・・うっ、う」

「・・・食の本能に、負けたのか。」

涙を流しながら語るシズナ。リュウも要約、全てを理解することができた。食の本能とは人間の、・・・いや、全ての生物が持つ、最も強い本能である。極限まで飢えに追い込まれたら、共食いさえも起こりうるのが世の中だ。・・・シズナはそれが耐えられなかったのだろっ。

「私は眼を閉じ、娘を必死に見ないようにしてきました。ですが、私は所詮、鬼です。もし、人を食していたら、娘さえも食らってしまっと思ったのです!!。・・・そんな私が、娘の傍に資格があるはずがありません。」

「だから誰かに娘を授け、死を選んだのか?。」

「・・・はい。」

頷くシズナ。おそらくシズナは、ずっと待っていたのだろっ。娘を託せる者を、・・・シグレを守るだけの強さを持つ者が、自分の前に現れることを。・・・すると、離れた場所で二人のやり取りを見ていたシグレが、父の元に近づいてきた。

「父…死んじゃうの?。」

「シグレ、…こんなに大きくなっていたのですね。」

シズナは、その赤い瞳で娘を見た。娘を餌と見てしまった時から、瞳を閉じ、けして成長する娘を見ることができなかったが、死ぬ間際にようやく見ることができた。シズナからは、静かに涙が流れる。…すると、シズナは刀を取り、それをシグレに差し出す。

あかばねおにがわら

「『赤羽鬼我羽羅』、これを貴女に授けます。あなたは瞳は赤いですが、角はなく、人を食す必要ありません。それは、人間の血を引いている証拠です。…どうか強く、強く生きてください!。
…。」

「父…。」

シズナは最後の力を振り絞り、娘を抱きしめた。…そしてシズナは、乏しくなった瞳でリュウを見つめる。

「娘を、…娘を…お願い…します…。」

そう言ってシズナは、静かに眼を閉じ、息を引き取った……。

「・・・何て、身勝手な愛情だ。」

息を引き取ったシズナを見届けたリュウは、シグレに近寄る。

「すまない。」

シグレに謝罪するリュウ。振り向いたシグレは、表情も無く無言であつたが、その顔からは涙が流れていた。テンも無言でそれを見ている。その沈黙はしばらく続いた・・・

続く

・
・
・
・
・
・
・
その時

第16話（後書き）

まだ続きます。次こそクライマックスです。

第17話（前書き）

前回の続きです。

第17話

涙を流しながら振り返るシグレ。しばらくその場は沈黙していたが、その時。

「御苦労だったなあ!!。」

「!!?」

突然声がし、振り向くとそこには、百人を超える海兵達がいた。リユウは、シズナとのやり取りに夢中になっていて、周りの警戒を怠っていた為、接近に気がつかなかったのである。

「本当にごくろうだった!!。おかげで裏切り者、「鬼のシズナ」を始末する手間が省けた。ムハハハ!!。」

「・・・貴様、政府の者か!?」

「如何にも、俺の名前はスパンダイン!!、世界政府CP9長官だ!!。」

CP9。それは、闇の正義の名の下に、非協力的な市民の殺しを世界政府から許可されている「世界政府直下暗躍諜報機関」。サイファーポールの一つで、世間では一般にCP1からCP8までの存在が知られているが、この他に陰で暗躍するCP9が存在する。

「……なるほど、シズナを始末する為に、海軍を引っ張り出してきたのか。たしかに、弱っていたシズナではこれだけの数の海兵達を相手にする体力はないからな。」

「そうだが、シズナは政府が保有していた唯一、海軍大将に匹敵する実力の持ち主だった。敵に回ればこの上ない脅威になっていたが、化物の分際で人間の女に惚れ込んだ。そのおかげで力は弱くなっているやがった。」

「化物だと。」

リュウは、その言葉に反応した。シズナの生き様を知ったリュウには、その言葉が感に触ったのだろう。

「シズナを始末する為に連れてきた海兵だったが、お前を片づけてシズナを始末した手柄を俺の物にすれば、俺の地位はさらに上がる！！。ムハハハハハ！！」

「……愚かな奴だ。」

リュウは何となくこの男を理解した。この男は己の利益と欲望のためなら、どんなことでもしようとする人間であると。政府が苦戦していた「鬼のシズナ」の討伐を、自分の手柄にしようとやって来たのだろう。……すると、スパンダインは、リュウの傍にいたシグレに目をやった。

「ん？・・・そのガキは、シズナの子供か？。ムッフ、使えそうだあ、・・・おい、そのガキをこちらに寄せ！！。」

「？、どうするつもりだ。」

「シズナの子供と言うことは、鬼の血を引いているということだ。鬼の力は強大だ、そのガキを再教育して政府の・・・いや、俺の手駒にしてやるっ！！。」

スパンダインは、シグレを自分の道具にしようとしていた。子供の中から徹底的に洗脳すれば、鬼を自在に操ることができると思っていたのだろう。・・・だが、リュウの答えは決まっていた。

「・・・断る。」

「何いっ！！。」

「この子の父、シズナは、お前達政府の・・・いや、俺達人間のために、過酷な運命を背負うことになってしまった。シズナが願っていたのは、この子の幸せのみ。・・・これから流れるこの子の運命、けしてお前達の自由にはさせない！！。」

「はっ！！、ふざけるな。そんな裏切り者の生ゴミの娘を、この俺様が使つてやるというてるんだ。素直に俺に寄せしやがれ！！。」
『シャカッ！』

銃を抜き出す、スパンダイン。リュウはサングラスを外し、戦闘態勢に入ろうとしたが、それよりも早く動いた者がいた。……それは、

『シュン!!』 『スパンツ』

「ぎいやあああああ~~~~~~~~っ!!!!」

「~~~~っ!!!!?」 「~~~~」

「お前…父、侮辱した……ゆるさない!!」

そう、誰よりも早く動き出したのは、シグレであった。シグレは、自分の背丈ほどある刀、あかはねおにがわら「赤羽鬼我羽羅」を抜刀し、スパンダインの持つ銃を切り裂いた。最上大業物12工の一振り、世にも珍しい赤い刀身をした「赤羽鬼我羽羅」が、月夜に輝く。その光景を見た全員が、目を見開いた。

「（今の動き、シズナに似ている。）……ふ、シズナ……お前の娘は、ちゃんとお前の背中を見て、育っているぞ。」

リュウは、横たわるシズナに向けて言った。この成長したシグレを見ることもできずに、この世を去ってしまったシズナ。その姿を見たリュウは、静かに決意した。

「お前の身勝手な愛情、……俺が引き継いでやるよ。」

そう決意したリュウは、シグレの頭に手を乗せ、後は任せると言わんばかりに、前に出た。対する相手側は、自分が切られた訳ではないのに、スパンダインがやたらと騒いでいた。

「切られた~~~~~っ!!もっ…もうダメだあ、畜生お〜!!。……上層部に伝えてくれ、この長官の座は、俺のせがれに……」

「長官、よくご覧ください。切られたのはあなたではなく、銃です。」

「!?!?!?!おお、そうか。なめた真似しやがって、もういい!、デメエも始末してやる!!」

部下のツツコミでようやく立ち直ったスパンダインは、後ろに控えていた海兵達に命令を下し、自分は後ろに下がる。そんな中、リュウは相手に向かって口走る。

「一つ、言うておく。……おとなしく引き下がれば、痛い目に合わずに済むぞ。」

「なっ!!、ふざけるなあ!!。殺れっ!!」

「「「はっ！」「」「」『『『パンツ、パンツ』』』

「ふん。」

一斉に発砲する海兵達。テンは空高く飛ぶ上がり、リュウもシグレ抱き抱え、飛んだ。するとリュウはシグレを抱えた状態で腕を構える。・・・そして、

「「粒子拳・流星群」」

『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

「「「ぐうああああああつ！！！！」「」「」

粒子拳を無数に放つ技、「粒子拳・流星群」を放ち、海兵達を打ち倒す。・・・百人を超えていた海兵は全員倒れ、残ったのはスパンダインと数人の部下だけになった。

「な、な、ウソっ！！」

「・・・残ったのはお前達だけだが、どうする？。」

「うつ！、・・・。」

リュウに睨まれ、押し黙るスパンダイン。しばらく黙っていると、

スパンダムは我先にと逃げ出した。

「おぼえてろお!!、俺様を怒らせたことを必ず後悔させてやる
うっ!!。」

「ちょ、長官!。待ってくださあい!!。」

勝ち目がないと踏んで、逃げていくスパンダイン達。・・・だが、そこでテンが。

「クププイー!!。」

『ビビビビビビビビビビビビッ!!!!!!!!!』

「「「ぎよわあああああああ!!!!!!!!!」」」

電撃を浴びせ、スパンダイン達は黒焦げとなった。

「クピイツ!。」

「お前も頭に来てたんだな、テン。『クイ、クイ』ん?、どうしたシグレ。」

突然、服を引っ張ってくるシグレに、リュウは訊ねる。

「……どうして、父の願いを…聞いて…くれるたの?。」

シグレは、シズナの願いに応えてくれたリュウに、その理由を聞いてきた。するとリュウは、指を天に指す。

「死んだ船長は、言っていた。愛する子供のために、命を捨てることができる父親は、本物であると。」

リュウは、腕を降ろし、手をシグレの頭の上に乗せた。

「俺は、そんなシズナの志を、汲んでやったにすぎない。」

サングラスをかけ直したリュウは、手をシグレの頭の上に乗せた状態で、横たわるシズナを見る。

「……シズナを、埋葬してやろう。」

「……うん。」

リュウとテンはシズナを埋葬した後、シグレの手を引き、船へと戻っていった……

……船に戻ると、グルメネコが料理を作って待っていた。

「おう、帰ったぞ。」

「クピィー」

「ん〜。」

出迎える、グルメネコ。するとグルメネコは見知らぬ少女がいることに気づき、木のプレート出し、聞いてくる。

「《その子はだあれ?》、この子はシグレ、今日から仲間になった。仲良くしろよ。」

「……ネコさん?。」

グルメネコを見つめるシグレ。しばらく見つめていると、シグレは手を差し出した。・・・そして。

「・・・・・・・・お友達に……なっ……て……ください……。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん~~~~~!。」

シグレがそう言うと、グルメネコは笑顔で、手を返してきた。どうやらお互い、認め合ったようである。シグレはそこで初めて笑顔を見せ、リュウも自然と笑顔になる。

「それじゃ、料理も出来ているみたいだし、メシにするか。」

「クピィー!。」

「ん~~~~~!。」

「・・・・・・・・いただきます。」

こうして、また新たに仲間が増えたリュウであった。・・・・・・・・

終
わ
り

第17話（後書き）

終わりました。このシグレは、史上最強の弟子ケンイチに出てくる、香坂しぐれのパクリキャラです。個人的に好きだったので出しました。・・・申し訳ないっ！！

〽キャラクター紹介〽 (前書き)

二人目のキャラクターを紹介します。

くキャラ紹介2く

名前

グルメネコ

見た目、特徴

二メートルを超え、三頭身。体の模様は、左耳と背中が一部茶色。目はまん丸で大きい。瞳はごまみtain、点になっている。死ぬ寸前だったところ、悪魔の実である「バケバケの実」を食べたことで化けて出たネコである。身体能力はやけに高く、得意な張り手で相手をなぎ倒す。美味しいものを求め、料理の道を極めようとし、リユウの仲間になった。言葉は喋ることが出来ない為、木のプレートに字を書いて見せる。化けネコのため、基本は不死身。（覇気による攻撃か、海楼石でないとダメージは受けない。）

性別

既に死んでいます、オスです。

強さ

海軍本部で例えると、中将クラス。

くキャラ紹介く（後書き）

このキャラは、うる星やつらに出てくる、コタツネコをモチーフにしています。

第18話（前書き）

前回から、しばらくした後の話です。

第18話

シグレが仲間に加わってから数日後、リュウ達一行はグランドラインにある小さな無人島にいた。その島は約3ヘクタール、（東京ドームと同じくらい）の面積しかなく、木や草はあるが森とは呼べず、島の半分以上が空き地となっているため、動物も住んでいない。・・・そんな中、リュウはシグレと対峙している。・・・そして、

「っ！！」

「ほっとっ！！」

リュウは、シグレと組み手をしていた。この前、スパンダイン達のやり取りの時に、シグレの太刀を見たリュウは、今のシグレの力量を正確に把握するため、シグレに組み手を頼んだのだ。シグレは木刀を手にし、リュウに果敢に攻めて行くが、リュウはそれを全て軽くかわしている。

「っ！」「っ！」「っ！」

「甘い！（この攻めは、全てシズナの動きを真似ているな。父親の戦いをよく見ていたんだろうな。）」

リュウはシグレの攻撃をかわしながら考えていた。するとリュウ

は、シグレの隙を突き、木刀を弾く。

「ふんっ！」『パチン！』

「っ！？」

木刀を弾いたリュウは、少し厳しい表情になり、シグレの前に立つ。

「お前は父親の戦い方を、真似しすぎている。幾ら同じ鬼の力があつたとしても、お前は所詮、女だ。男であるシズナのようなパワーに特化した戦い方はできん。」

「・・・・・・・・」

リュウは、厳しい表情でシグレに言う。シグレの剣技は、全てシズナのコピーと言ってもいい。同じ血を引いているため、それなりの力を発揮しているが、所詮格下の相手にしか通用しない。自分に合い、より高みを目指すような戦い方をしなければ、強者との戦いには到底、生き残れない。そう言われたシグレは、何も口に出さず下を向いていたが、リュウがシグレの頭に手を乗せる。・・・

「？」

「シズナの戦い方で、そこまで戦えるとは大したものだ。よほど

父親を尊敬していたんだろう。・・・だが、無理をして強くなろうとするな。自分の戦い方を見つけ、ゆつくり強くなってゆけ。・・・死んだシズナに、胸を張って言えるようにな。」

「! ! ! ! ! うん。」

笑顔でシグレに語るリュウ。それ見たシグレも、笑顔で返事をする。するとリュウは何かを思いつき、シグレに訊ねる。

「所で一つ聞きたいんだが、お前は刀以外の武器は使えないのか？」

「? ! ! ! ! 苦無と手裏剣! ! ! ! ! 後、鎖鎌が使える。」

「! ! ! ! ! まるで、忍者だな。・・・そうだ! ! ! ! ! なら、お前は忍者スタイルで戦えばいい。」

「忍者? ! ! ! !」

頭に? マークを浮かべたシグレ。リュウは忍者について、説明する。

「忍者とは、諜報活動や暗殺に特化した者を言う。その為、最低限の力で相手を倒すことに長けているんだ。お前は俊敏性に長けていて、さらに五感も鋭い。少ない力で相手を倒せる戦い方で鍛えて行けばいい。」

「……それで、…強く…なれる?。」

シグレは、真剣な表情でリュウに訊ねる。するとリュウは、

「それは、お前次第だ。……」

「……………うん。」

そう答えたリュウに、シグレはまたまた笑顔で答えた。さらにシグレの顔には、しっかりとした決意と覚悟のようなものを感じた。

「それじゃ、もう一度「クピクピイー!」、ん?」

もう一勝負をしようとしたら、テンがやってきた。

「クピ、クピ、クピプウ。」

「何?、食事の用意ができたから、早く来いって?。」

「クピイ」

「そうか、じゃメシにするかぁ。行くぞシグレ。」

「うん。」

リュウ達は、組み手を一時中断し、船へと戻っていった。

……船に戻ってみると、グルメネコが浜辺でバーベキューの支度をしていた。

「ほお、バーベキューかあ。グルメネコ、お前最近、料理のレパートリーが増えたな。」

「ん〜!。」

胸を張って、エッペンとしたポーズをとるグルメネコ。リュウは全員、席に着かせ、食事を取ろうとした。

「それじゃ早速、．．．いただきます。」

「クピィ〜!」「ん〜!」「…いただきます。」

全員、いただきますをして、料理を食べる。．．．しばらくすると、グルメネコがリュウに紙を渡してきた。

「ん?、何だ?。」

「ん〜、ん〜。」

「ええと、《今朝買った、新聞に挟まってた、手配書だ。》、新しい手配書か。」

木のプレートで、そう伝えるグルメネコ。リュウは、その手配書に目をやると、そこには驚くべき人物の顔写真が張られていた。

「鬼の子、シグレ」。懸賞金、8千700万ベリ！。．．．．

「．．．．．子供に、なんて額を付けるんだ、全く。．．．．

」

終わり

第18話（後書き）

今回は、1話完結です。

〵お知らせ〵（前書き）

設定の変更をお知らせします。

くお知らせ

新たなストーリーを考え付いたので、少し設定を変更させていただきます。

変更内容

・リュウが、海賊王のクルーであったことは、世間には知られていない。

・リュウの年齢を、一つ上げる。

・リュウは、霸王色の覇気を持っていない。

・技の設定変更。

以上、このように変更させていただきます。本文で紹介した設定は、すでに改善しました。

最近、話しはそれなりに思いつくのですが、どうも今までの設定だと、できない話しが多かったのです。これから先も、変更があるかもしれませんが、そこは素人のため、ご了承ください。

第19話（前書き）

前回の話時から、数日後の話です。

第19話

グランドラインを航海しているリュウ達は、とある場所に向かっていた。それは、

「クピ、クピ。」

「ん？どこに向かつてるって？。」

「クピプウ。」

「ああ、これから向かう場所は、ウォーターセブンだ。」

ウォーターセブン。かつて、造船業で一時代を築いた島である。しかし、グランドラインの島であるため、周囲の島との連絡がつきにくく、加えて、8年前に大海賊時代が幕を開けたことによって島は海賊が徘徊はいかいしている始末である。・・・、リュウは、そのウォーターセブンに向かっていた。

「・・・何しに…行くの？。」

「ん？」

テーブルでミルクを飲んでいたシグレが話をかけてきた。実はリュウがシグレにミルクをやった所、シグレは大変、ミルクを気にい

ったようで、今では毎日飲んでいる。そのおかげか、シグレは最近、背が伸びてきた。

「ああ、実はウォーターセブンに知り合いの船大工がいてな、そいつに新しい船の造船を依頼したんだ。それで、もう出来あがるって聞いたから、取りに行くんだ。」

「新しい船？」

「そうだ。」

そう、リュウは新しい船に乗り換えようとしていた。実は、ずいぶん前から考えていたことで、船員も増えて来たから、昨年に船の製造を依頼したのだ。正直、今の船はかなり窮屈になっていた。まずキッチンがグルメネコが主に活用しているが、元々、人間サイズであった為、体格がデカイグルメネコではかなり扱い辛かった。寝室も一つしかなく、リュウも既に身長が190を超えて、入り口を屈んで入るようになっていた為、リュウは船の新調を決意した。最近ではシグレが船の上で鍛錬ができないと言ってくる上に、なにやり……

『カジカジカジカジ』

「コラあ！テン、船を食べるなと何時も言ってるだろ！！。」

「クプ？」

テンが、あちこち食べてしまう為、船はかなり傷んでいた。とまあ、こんな感じで、リュウ達はウォーターセブンに向かう。……

……数時間後、ウォーターセブンが見えてきた。

「あれが、ウォーターセブンだ。……また、だいぶ変わっているな。」

遠くから見ても分かるぐらいに、島は変化していた。まあ、当然ではある。昔から造船の盛んな島であるが、島全体が地盤沈下により水没し続けている。、現在の町並みはかつて、水没した建物の上に建造物を載せた構造となっているのだ。加えてアクア・ラグナという高潮が毎年押し寄せ、水害に晒され続けている町でもある。

「じゃあ、島に上陸『ドーン!!』、って何だ?。」

「『!!?』」

突然、大きな音になって全員が振り向くと、

「列車か?、しかも炎上して沈んでいる・・・。」

どういう訳か、列車が海の上で炎上していた。すると炎上していた列車から人が出てきて、何か言い争っていた。

く列車、側く

「たっはっ！……！！……！！……！！……！！……、また沈んじまった。」

「クソっ！！、また失敗だ！！。」

「なんでだあッ！！」

高笑いする魚人と、沈んだ列車を見て嘆く、若い男が二人。すると、若い男たちがケンカを始めた。

「おい、バカバグっ!!。お前、取り付け間違えたんじゃないエ
 だろうなっ!？」

「ンマー、何ふざけたことを言っただやがるっ!!、バカンキーっ!!。お前こそいい加減にやって、部品を破損させたんじゃないだろうなあ!?!」

と、言い争っている内に、取っ組み合いになってしまった。そんな状態でも魚人の方は高笑いをしていたが、取っ組み合ってる二人に向かって語り出す。

「たっはっ！！！！……一緒に船を作る仲間同士で騒ぐな。失敗したなら、また造りゃいいんだ。造った物に男は、ドン！と、胸をはれ！！！！。」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

そう言われると、二人はケンカをやめた。二人とも納得してない顔をしているが、ケンカをしても何にもならないと分かったみたいだ。

「それじゃあ、使えるもんをサッサと回収して帰る『ズバーン！！！』、ん！？」

と、突然水しぶきが上がると、その中から巨大な海王類が現れた。

「キュルキュルキュルキュル！！！」

「きよっ！！！！、巨大イルカだぁーーーーっ！！！！」

現れたのは全長100メートルを超える、巨大肉食イルカであった。二人が大騒ぎをしている中、魚人は手にハンマーを取り、構える。・・・が、その時。

「『粒子拳』」
りゅうしけん

『ドーーーーーン！！！！！！！！！！』

「『！！！！？』」

突然、巨大イルカが物凄い勢いで吹き飛んだ。一体なにが起こったのか、訳がわからない一同であったが、

「おーい！、大丈夫かあ！」

「っっん！？」

声をかけられて振り向くと、20メートル位の中型船が近づいていた。

「つて、トムじゃないか。」

「そう言うお前は、リュウじゃねエか。・・・」

そう、リュウが造船を依頼した、知り合いの船大工は、造船会社トムズワーカーズの社長、トムであった。・・・

続く

第19話（後書き）

今回は原作キャラと絡ませてみました。この話は原作にオリジナルストーリーを付け加えますで、まだ続きます。

第20話（前書き）

前回の続きです。

第20話

「たっはっ！……！！……、いやゝすまんかったな。おかげで助かったわい。」

高笑いしながら礼を述べてくるトム。

「なあに、気にするな。目の前で危機にさらされている友人を助けるのは、当然だ。」

リュウもそれを笑顔で返す。

「ンマー、ありがとう。さっきは死ぬかと思った。」

「へっ！。……あんな海王類、俺のバトルフランク121号があれば倒せたぜ。」

続けて礼を言うトムの1番弟子のアイスバグと、ひにくを垂れている2番弟子のフランク1。……実は、トムズワーカーズの面々とは結構前からの知り合いで、リュウはたまに仕事を依頼していた。現在大破した機関車の部品を運んで、リュウ達と一緒にウォーターセブンに向かっている。

「そうかあ、これが話しに聞いた海列車かあ。この様子だと、失敗したみたいだな。」

「なあにまだまだこれからだあ。それにしても、またクルーが増えたなあ、そっちの女の子は初めて見る。」

「ああ、最近仲間に加わったシグレだ。まだ小さいけど中々の実力を持っている。」

「・・・はじめまして。」

軽く頭を下げてあいさつをしたシグレ。他の二人にもあいさつをすませ、すっかり馴染んだようだ。そして、シグレを紹介している間にテンが、

「カジカジカジカジ」

「あつ!」「またかあ」

テンが機関車の部品を食べ始めていた。それを見て、トムズワーカーズの一同が騒ぎだす。

「ああっ!!ぶ、部品があ!!」

「たっはっはっはっ!!、相変わらず見事な食いつぶりだあ。」

「テムエーっ！！ハネチビっ！！、大事な部品を食べるなあ！！」

上からアイスバーグ、トム、フランキーの順で声がとぶ。早速フランキーがテンを追いかけまわした。

「クププピー！」

「待ちやがれっ！！ハネチビっ！！、今日こそ叩きのめしてやるう！！。」

「たっはっはっはっ！！、相変わらず仲がいいじゃねえか。」

「全くだ、意外といいコンビになってるなあ。」

追いかけてっこをしているテンとフランキーを見て、リュウとトムは何気に和んでいた。こんな調子で、一同はウォーターセブンに向かっていった。……

……そして島に着き、リュウ達はトムズワーカーズの本社に向かった。たどり着いたリュウはトムと二人になった所で早速、製作を依頼した船の話を切り出す。

「で、依頼した船の具合はどうだ？。」

「ああ、もうほぼ完成している。後は仕上げだけだから1日もあれば完成だあ。」

「そうか、すまないな、海列車の製作で多忙な所に、船の製作なんか依頼してしまって……」

本当にトム達には申し訳なかった。トムはゴールド・ロジャーの船、オーロ・ジャクソン号を製造したことによって、政府から死刑判決を下されていたのだ。本来、船大工は誰に船を売っても罪にはならないが、海賊王であるゴールド・ロジャーに限っては特例であった。海賊王の海賊行為に少しでも肩入れした者は全てが危険人物とみなされ、そのほとんどの者が死罪が言い渡されていた。幸いトムは、海列車を開発すると言うことで10年間の執行猶予が付き、今に至っていた。……リュウは海賊王のクルーであった為、そのことで申し訳なく思っていた。

「たっはっはっはっはっ！、気にすることはねえ。……どんな船でも造り出すことに善も悪もねえ、お前さんの事情も知ってる。……何より！」

トムは真剣な表情になりリュウを見つめる。・・・そして、

「わしはロジャーと言う男に力を貸した事を、ドンと誇りに思っている!!。」

「・・・そうかあ。」

トムは胸を張りそう語る。トムの目には一切の迷いも後悔も無かった。それを聞いてリュウも気持ち became 楽になった。

「今のうちに、船を見ておくか?。もう倉庫に運び入れとるが。」

「ああ、頼むぜ。」

リュウはトムの案内で、橋の下の倉庫に向かった。・・・中に入ると、

「ほあ、これが新しい船かあ。」

「そうだあ、ちゃんと要望どおりにしておいたぞ。」

そこには全長50メートルほどの船があった。横の長さも20メ

ートル以上あり、船の上で派手な鍛錬もできるようになっていて、リユウはそれに満足していた。

「船の名は、オメエさんが決めてくれ。」

「ああ。・・・て、言うかもつ名前は決めているんだ。・・・」

リユウは船を見つめて、名を語る。・・・

「こいつの名は、世界を流れる船、「ワールド・ストリーム号」だ！」

続く

第20話（後書き）

この話はまだ続きます。船の名前は適当に付けました。

第21話（前書き）

前回の続きです。

第21話

完成まじかの船を見せてもらったリユウは船に名前を付けた後、トムと一緒にみんなのいるダイニングに向かった。

「明日には仕上がるから、今日は家に泊っていきな。」

「ああ、ありがとう、助かるよ。」

そしてダイニングに着くと、フランキーがまたテンを追いかけて回っていた。

「クプクプイー！」

「待てエー、ハネチビっ！！。てめエオレのバトルフランキー20号を食いやがったなあっ！！」

「ンマーちょうどいいじゃねえかあ、あんな危なっかしいモン何か綺麗サッパリ食ってもらったほうがいい。テン、ドンドン食ってくれていいぞ。」

「クプイー！！」

「ふざけんなあ！！、バカバーグっ！！」

今度はアイスバーグと取っ組み合うフランキー。その光景を少し離れて見ていたシグレとグルメネコ、

そしてその隣にはトムズワーカーズの美人？秘書のココロがいた。

「あいかわらずバカやってんねエ、あいつらは。」

「たっはっはっはっ！、それだけ仲がいいってことだあ。」

「あ、トムさん・・・て言うか笑いすぎだよ。何がツボに入っただい？。」

弟子のやり取りを見て高笑いするトムに、ココロがツっこむ。すると二人のケンカをずっと見ていたシグレがリュウに質問してきた。

「・・・あれ、…仲良しなの？」

「ん？・・・ああ、あいつらは毎日のようにケンカをしているが、あそこまで本音をぶつけ合いながらも家族のことを思っているんだ。今時、血の繋がった家族でもそうそうないな。」

「・・・家族・・・」

シグレは家族という言葉に強く反応した。その言葉で父親のことを思い出したからである。・・・しばらく黙っていた後、リュウに向かって喋り出す。

「リュウ、……僕達…家族?…」

「……ああ、お前たちは俺の大事な家族だ。」

リュウはシグレの頭に手を乗せて笑顔で答えた。リュウはシグレの思っている事をすぐに理解していた。一人旅を続けていたが、今ではいい家族ができてリュウは心から満足している。そして、その答えを聞いたシグレも笑顔となる。

「たっはっはっはっ!、今夜は賑やかに成りそうだあ!。ごちそうを用意しねエとなあ!。」

「それならこちらに任せてくれ。……グルメネコ、お前が腕を振るってやれ。腕が上がった所を見せてやりな。」

「ん~~~~!」

笑顔で返事を返したグルメネコは早速、準備に掛った。……そして夕食。

「ん~~~~。」

食卓には、豪勢な料理が並んでいた。早速、テンやフランキーが料理を奪い合う。

「クピーー!!」

「コラあ、ハネチビ!!、そりゃオレのだあ!!」

「バカンキー!!、もっとおとなしく食べるお!!」

「……おいしい…」

「たっはっはっは!!、うめえ御馳走にこんな賑やかな客人、今日は楽しいなあ。」

「笑いすぎだよトムさん、……まあ今日ぐらいはいいね。」

「……ふん。」

リュウはそんな光景を見て、笑顔で笑う。こうして賑やかな夜は終わった。……

・・・・・・・・夜遅く。

『カンッ、カンッ、カンッ、カンッ』

倉庫の中で金づちの音が鳴り響いていた。どうやらトムが海列車の組み立てをやっていた。リュウは、音に気づいて倉庫にやってくる。

「せいがでるなあトム。」

「ん？リュウか、起しちまったようだなあ。」

リュウが要ることに気づいたトムは、手を休め立ちあがる。リュウは夜分遅くまで仕事をしているトムが少し気がかりになっていた。

「あまり夜更かしは良くないぜ、睡眠不足はいい仕事の天敵だからな。」

「なあに、これぐらいどうってことねえさ、今度の海列車は中々いい出来前だからな。たっはっはっはっ！！」

「誤魔化すなよ。あんたは言葉の後に笑う時は、だいたい何かに

悩んでいる時だからなあ。．．．何か困ってるんじゃないか？、グ
チくらいは聞いてやるぞ。」

「．．．．．」

トムは珍しく黙り込んだ。おそらくリュウの読みは当たっていた
のだろう。トムはしばらく黙っていると、リュウの方に振り向き口
を開いた。

「．．．リュウよ。」

「何だ。」

トムに呼ばれて返事を返すリュウ。すると、トムの口から意外な
言葉がでた。．．．．．

「
．．．お前に、仕事を依頼したい。」

続く

第21話（後書き）

まだ続きます。

第22話（前書き）

前回の続きです。

第22話

夜が更けた頃、リュウとトムが倉庫内にいた。そしてリュウはトムから思いがけない言葉を聞く。

「お前に仕事を依頼したい。」

「仕事？・・・」

「この仕事を引き受けてくれれば、お前の船の支払いはタダでいい。・・・」

トムはリュウに仕事を依頼してきたのだ。こちらから仕事を依頼することはあるが、トムからの仕事の依頼は初めてのことであり、リュウは少し戸惑っていたがトムの目は真剣そのものであった。トムは本気で困っているのであろうとリュウは確信し、事情を聞くことにする。

「どうやら本気で困っているようだな、まずは内容を聞こうか。」

「ああ、一緒にダイニングまで来てくれ。そこで話す。」

「・・・ああ。」

リュウはトムと共にダイニングに向かう。・・・ダイニン

グに着いた後、他の連中が寝ている中リュウは席につき、トムは机の引き出しから何かを取り出しリュウの向かいに座る。そしてトムは口を開く。

「実はお前さんには、ワシと一緒にこれを取りに行つてほしいんだ。」

「これ？。」

トムは手に握っていた物をリュウに見せる。それは手の大きさをらいの金属の塊であった。リュウはそれを手に持つて見る。

「これは・・・鉄じゃないな、それに鉄よりも軽い・・・何だこれは？。」

「これはツタンと言って、かなり特殊で貴重な金属だ。」

トムは、このツタンについて説明し出す。そして海列車の現状について語り出した。

「実は、海列車に関しては設計も組み立ても出来あがつてるんだ。ただ問題なのは列車の重量なんだ。」

「重量？」

「ああ、海列車は構造と強度の関係でほとんどが金属で出来ている。そして金属には鉄を使用しているが、鉄では重量があり過ぎて海に引いた線路が耐えられねェんだ。」

海列車で抱えている問題を細かに説明するトム。リュウはそれを真剣に聞きとる。

「だが、このツタンさえあれば問題は解決する。このツタンは比重が鉄の半分しかなくてなあ、さらに強度、耐久性、柔軟性、さらに酸化し難くサビに強い。現在使用している金属をこのツタンに変えれば、海列車を完成させることができるんだ。」

「なるほど、聞けば聞くほど大した金属だな。・・・だが何故、俺に頼むんだ?。」

「このツタンは自然界にそれなりに存在するが、集積度がさほど高くねえ上に製錬が難しい。そのせいかほとんどの国や島では取り扱ってねえんだ。おそらく政府ですらロクに扱ってねえ。・・・だが、ワシならこれを製錬することができる。問題はこのツタンが採れる場所だ。」

「場所?。」

「ああ、ワシはこのツタンが豊富に採れる島を一つだけ知ってるんだが、その島はカームベルトにあるんだあ。」

「・・・・カームベルトか。」

カームベルトと聞いてリュウは何となく理解した。カームベルトは超大型の海王類の巣であり、海軍艦でもない限り渡ることはまずできない。魚人ならば何とかなるかもしれないが、一人では到底ムリな話だ。

「昔、腕利きの魚人仲間と供に行ったことがあるんだが、その島には強力な猛獣達が住みついていてワシ一人では到底ツタンを採掘するのは不可能だ。・・・だから、お前に動向を頼んだんだ。」

「確かに、俺ならカームベルトを安全に渡る術を持っているからなあ。・・・」

「危険な島だから、アイスバーグとフランキーは連れて行くことはできねえ。・・・リュウよ、どうかワシと供にその島に行ってくれねえか？」

トムは頭を下げてリュウに頼み込む。トムは家族を危険に晒したくないためリュウに頼み込んだのだらう。リュウもそのことには何となく気づいていた。

「ちなみにこの事は、二人に話しているのか？」

「いや、二人には話しちゃいねえ。もしこの事を知れば、アイスバーグはともかくフランキーは意地でも着いて着ちまうからなあ・・・」

「そうか……」

事情を知ったリュウ。そしてリュウの出した答えは

「いいだろう！、引き受けたぜ。」

「本当か！」

「あんたには色々世話になっているからな。もちろん報酬なんて
いらぬ、俺は友の頼みで引き受けただけだ。」

「そうかあ、……すまねえな。」

トムの頼みを心良く引き受けたリュウは、トムと握手を交わした。
……

続
く

第22話（後書き）

次回に続きます。これは勝手なオリジナルストーリーです。

第23話（前書き）

前回の続きです。

第23話

トムの頼みを心良く引き受けたリュウはトムと握手を交わした後、眠りについた。・・・

・
・
・
・

翌朝、まだお日様が昇らない早朝にリュウとトムは支度をしていた。

「ん〜。」

「グルメネコ、それはこっちの運んでくれ。・・・すまないな、お前まで同行させることになって。」

「ん〜。」

すまなそうにするリュウにグルメネコは笑って返事をする。リュウはグルメネコにだけは同行をお願いしていたのだ。今回はかなりの大仕事になりそうで、力持ちであるグルメネコなら、うってつけだと思ったのである。なにより食事係として最適であった。

「……よし、これで終わりだ。」

必要な物を船に積み、出航準備は整っていた。三人が船に乗り込むと、それを秘書のココロが見送る。

「あいつらの様子はどうだ?。」

「ああ、全員グッスリ寝てるよ。あいつらのことはあたしに任せな。」

「しっかりと見張りを頼むぜ。特にテンやフランキーは俺達が黙って行ったことを知ったら暴れまわるかもしれないからな。」

「なあに、何時ものことだよ。どうってことないね。」

リュウとトムは弟子と子供達の世話をココロに任せた。

「それじゃリュウ、出発するぞ。」

「おう。グルメネコも準備はいいか?」

「ん〜〜!」

「気よつけて行きなあ、全員無事に帰ってきなよ。」

リュウ達は船を出し、出発した。・・・

「・・・・・・・・さてと、あいつらの様子でも見に行くか。」

ココロはみんなが眠っている寝室に向かう。・・・・そしてたどり着き部屋を覗くと、

「・・・・・・・・ガキ供とフランキーがいないねえ。」

部屋には、テン、シグレ、フランキーの姿がなかった。ココロはしばらく立ちつくすと、

「は~~~~、やられたね。」

大きくため息をついたのであった。……………

……………出航してから、2時間が過ぎた頃。もう日が昇り明るくなっていた。

「ん〜！（朝食の用意ができた）。」

「ん？、おお朝飯か。トム！、朝飯の支度ができたぞ！」

「たっはっはっ！！そうかあ、今行く。」

ダイニングに集まった一同は朝食を食べ始める。実は朝早くそれもみんなに黙って出発したため、朝起きてから何も食べていなかったのである。

「ぷはあゝ、やっぱり朝はミルクに限『ぐうゝゝゝゝ！』る、ん？なんだ・・・」

ミルクを飲み干した後に突然おかしな音が成り、リュウ達は警戒をした。

「この気配は、・・・そういつことが。トム、グルメネコ、ちよつと来てくれ、用ができた。」

「・・・わかった。」

「んゝゝ。」

そう言われると、二人はリュウと共にダイニングから出て行った。
・・・そして、

『バツ！！』

勢い良く何かがとび出して来た何かが、テーブルの上にあった食事を平らげ始めた。

「んっ！！、うめえなこれ。」

「クピッ！」

「・・・おいしい…」

現れたのはフランキー、テン、シグレの三人。三人はよほど腹を空かしていたのかテーブルの上にあった食事を夢中になって食べ進める。・・・すると、

「そらっ！」

『ブアンッ！！』

「「「！？」」「」

突然風呂敷に包まれた三人。するとそのまま運ばれ、デッキに放り出された。

「ほいっ」と

『ドタッ！！』

「いてっ！」「クプッ！」「・・・痛い。」

風呂敷から出てくる三人。三人が見上げるとリュウ、トム、グルメネコの三人が立っていた。

「たっはっはっはっ！！、船に乗り込んでやがったかあ！！」

「ん〜。」

「全く、盗み聞きしていやがったなあ、何で乗り込んできた？。」

トムは高笑いし、グルメネコは腕を組んで唸っている。そしてリユウは真剣な表情になって喋りだす。するとフランキーが反論し出した。

「ふざけんなっ！！俺達に黙って行きやがってえ！！。そんなに俺達が信用できねえ」そうだ。「か、っ！？、なんだとっ！！」

フランキーの言葉にリユウはキツパリと答えた。フランキーはそれに激怒しリユウに掴み掛る。

「てめエー、もういつペン言ってみやがれえ！！」

「ハッキリ言う！、テンはともかくお前とシグレの腕では信用できない！！。」

「てめエ『ガチッ』うぐっ！！」

『ドスッ！！』

リュウはフランキーの首を掴み、床に押し付ける。トムはそれを止めず黙って見続けた。

「何故トムがお前に黙って行っただか教えてやる、お前を守ってやるだけの余裕がないからだ。・・・シグレ、お前もそうだ。」

「!?!?」

「これから俺達が行く島はかなり危険な場所だ。それに対してお前達の力はあまりにも弱い。・・・俺もトムもお前たちに安心して背なかを預けることができないだ。」

「くっ・・・」

フランキーは口を噛みしめる。厳しい言葉で事実を語っているが一切の躊躇^{ちゆうちょ}はしない。なにより、リュウもトムも皆の身を案じているからである。

「もしそれでも付いてくると言うならば、・・・最低でも死ぬ覚悟^{かくご}ぐらいは持つてもらおう!」

「くっ!!?!?」

リュウは殺気をシグレとフランキーに放った。

「それが持てないのであれば、今すぐウォーターセブンに引き返しお前たちを降ろす。・・・」

リュウの言葉にフランキーは口ごもるが、シグレは一步前に出てリュウの前に立った。そして語り出す。

「・・・危険を恐れてちゃ前には…進めない。・・・僕は…強くなりたい、…少なくとも…仲間が安心して…背中を預けてくれる…くらいに…。」

「お、俺だつてそうだあ!!。俺は何時もトムさんに守られてきたんだ!。トムさんが俺を頼ってくれるくらいにならねえと申し訳ねえ!!。」

「……………そうか。」

シグレに続いてフランキーも語り出した。二人の眼にはしっかりとした覚悟が見える。それを見た一同は自然と笑顔になった。

「たっはっはっはっ!!、ガキどもが一著前に言うじゃねえか。」

「こうなったら、もう止まらないな。いいだろう全員で行くことにしよう。」

「クプププー!!」

リュウの言葉にテンが大喜びする。トムは笑い、グルメネコも笑顔になった。

「グルメネコ、改めて朝食の準備をしてくれ。まだ途中だったかな。」

「ん〜」。

そう言われたグルメネコは船の中に入っていった。他のみんなもそれに続く。……。そして、デッキにはリュウとトムの二人だけになった。

「……トム、あんたいい弟子を持ったな。」

「お前さんこそ、いい仲間を持ったじゃねえか。」

二人は笑顔で語り合い、船の中に入っていた。こうして新たに三人を加えたリュウ一同は、目的の島に向かったのであった。・・・・

続く

第23話（後書き）

続きます。・・・最近ゲームを買ってしまい、更新が遅れていました。たぶんこの先、不定期になると思います。

第24話（前書き）

前回の続きです。

第24話

ウォーターセブンを出発した、リュウ一同。海に出て三日が過ぎた頃、カームベルトの近くまでやって来た。

「リュウよ、頼むぞ。」

「OK、わかった。ふうー……。」

リュウは大気中の粒子を船底に集め、船を海面スレスレに浮かせる。

『ゴドッー！』

「ふうー、船が大きいとやっぱり大変だなあ。」

ため息をつくリュウ。リュウ達が乗る船は貨物船であった為、その大きさは100メートルを超えていた。さすがのリュウもこの大きさの船を浮かすのは一苦勞であった。

「スゲえー、船が浮いてやがる。」

「……リュウ…スゴい…。」

!。
」

「「「おおー!!。」「」

リュウ達一同は洞穴の中に船を進めた。・・・そして、夕食を済ませた後、トムは皆を集め明日の行動について話し合った。

「全員これを見てくれ、ワシが作ったこの島の地図だ。」

トムはテーブルの上に地図を広げる。

「すげー、かなり詳しく書き込んだやがる。さすがトムさんだぜ。」

「ほお、結構広い島なあ。・・・それで、肝心のツタンがある場所は？」

「ああ、この島の中央にある洞窟だ。ここから地下に進むことができる。」

バツ印の付いた所に指を指すトム。トムはその洞窟に行くまでの道のりと洞窟の中について話し出す。

「まずはこのジャングルを通らなければならねえ、かなり険し

いジャングルの上に猛獣がウジャウジャしてやがる。歩いて行くと丸一日掛るだろう。そして、ジャングルを抜けたら溪谷^{けいこく}に出る。」

「溪谷があるのか？」

「ああ、この溪谷には猛獣がいねえから問題なく進めるはずだ。そして、この溪谷を進むと洞窟にたどり着く。……だが、問題は、この洞窟の中だ。」

トムは洞窟の中について話し出すと、顔が険しくなった。リュウはトムの姿を見て何となく理解する。おそらくこの道のり以上の危険がその中で待っているであろうと。

「この洞窟の中に何がいるんだ？」

「……メタルオロチだ」

「メタルオロチ？」

「全身が金属で覆われている巨大蛇だ。凄まじいパワーを持つてる上に物凄く俊敏だ。しかも、洞窟の中だと下手に戦うことができない。……こいつに沢山の仲間が餌食になっちまった。」

トムは目を閉じ悔しげな表情になった。普段こんな顔を見せないため、一同は黙り込んでしまった。……するとリュウが、

「心配するなトム。こっちは死ぬつもりは無い。」

「おうよ、トムさん!!。俺はそう簡単には死なねえぜ!!。」

「クルツピー、クピプウ!!。」

「僕は…死なない。」

「ん~~~~!（死んでたまるか!）。」

リュウに続いて一同全員、トムに誓いを立てた。少なくともここにいる全員はトムを悲しませるようなことはしないだろう。そんなみんなを見たトムは自然と笑顔になった。

「リュウ、おめえら……すまねえ。」

「気にするなトム。……さて、全員そろそろ寝るとしよう。
明日は大変になるから、しっかり睡眠を取っておけ。」

「「「おおー!!。」」」

全員立ち上がり部屋を出て行った。子供達とフランキーが出て行った後、リュウは部屋に残っているトムに振り向き、語り出した。

「トム。」

「何だ？。」

「……俺が、誰も死なせないさ。」

「リュウ、……ありがてえ。」

そう語り終わったリュウは部屋を後にした。こうしてリュウ達一同は一夜を過ごしたのであった。……………

……………翌朝、

「おめえら、準備ができたなら出発だあ！」

「……おおー！！。」

「トム、この洞穴から行けるのか？。」

「あつちに抜け道がある。そこを抜ければジャングルの前に出るはずだ。」

トムの案内で一同は抜け道を歩きだす。そしてしばらく歩いたら奥から光が差し、出口が見えてきた。そして出口を抜けたその瞬間、・・・・・・

「何なんだ、これは。・・・・・・」

続く

第24話（後書き）

続きます。ロクに内容が込められませんでした。・・・申し訳
ないっ!!。

第25話（前書き）

前回の続きです。

第25話

洞穴から出てきたリュウ達一同の目の前には驚きの光景が広がっていた。

「何なんだこれは!?!」

「うぁ!」

「な、何だこりゃぁ!?!」

リュウ達の目の前には、40メートルはある獣が真っ二つにされていた。

「ト、トムさん。こいつは何なんだ!?!」

「こいつはヘルバツファローだ。この島にいる獣の中ではかなり大型で強暴なヤツなんだが、なんで真っ二つなっているのかはわからねエ。」

真っ二つにされている獣を見て動揺している一同だったが、リュウだけは獣には一切目をやっていなかった。・・・リュウが見据えている物はさらにその先にあつたのである。するとリュウは突然歩きだし、獣を通り過ぎていった。

「クピ？」

「・・・リュウ。」

獣を通り過ぎたところで立ち止るリュウ。一同はリュウの奇妙な行動が気になり、リュウの元に駆け寄る。・・・するとそこには、さらに驚くべき光景が広がっていた。

「・・・何とまあ、これは・・・」

「う、う、うウソだろっ!？」

一同の目の前には、さっきの獣よりも何倍もありそうな大岩が真つ二つとなっていたのである。その光景を見た一同はさらに訳がわからなくなっていた。

「何だっ！コリヤっ!？。何がどうなったらこんな風になるんだっ!！」

訳がわからず、大騒ぎをするフランキー。他の皆も驚きのあまり声も出ないでいたが、リュウだけは真剣に真つ二つになっている岩を見据えている。・・・そしてしばらくした後、口をひらいた。

「……………これは、刀による切り口だ。」

「刀？」

「おいおい！、刀なんかでこんなとんでもない事が出来るのか！？」

「一流の使い手ならば可能だ。それに、…………シグレ、触ってみる。」

「……………うん。」

リュウに言われて、恐る恐る触り出したシグレ。

「……………スベっスベ。」

「そうだ。これを使った者は凄まじいほどの腕を持っている。おそらくお前の父、シズナと同等クラスの剣術使いだ。」

「っ！？」

父親と同等と言われて激しく動揺するシグレ。それはそうだろう、常に父親の傍にいたシグレにとっては父親の実力は誰よりもよく理解していたのだから。その父親と同等であるならこれほど驚きものは、他には無い。

「トム、どうやら俺たちの他に誰かがこの島にいるようだ。」

「ああ、・・・だが、こんなとんでもない事をしやがる奴は、一体どんな奴だあ？」

「さあな。・・・ただ、敵に成らないことを祈るばかりだ。」

「敵に？」

「ああ、もしこれをやった者が敵になったら、・・・。」

リュウは真剣な表情になり皆のいる方向に振り向く・・・そして、

「・・・最悪、全滅を覚悟しなければならない。」

「「「つ！！！？。」」」

リュウの言葉で一同に緊張が走る。だが、目の前に広がっている光景を目の当たりにした一同には、容易の想像できた。こんなとんでもない事をやってしまう者が敵になったら、自分達にはどうにもならないと。

「…………シグレ、フランキー、お前たちは船に戻れ。これは想像以上に危険が伴いそうだ。」

「…………ヤダ。」

リュウは今の現状を見てシグレとフランキーを船に戻そうとしたが、シグレはキツパリと反対する。どうやらシグレは恐怖よりも、これをやった者の腕を見てみたいと言う純粋な好奇心の方が強かったようだ。

「お、俺だつてそうだあ！。命をかけてこの島に来たんだ。今更後に引けるかっ！」

フランキーもキツパリと断った。そんな二人を見て、リュウはため息を付く。…………するとリュウは皆の方に顔を向けて口を開いた。

「分かった。…………だが、これだけは言うておく。…………け

して一人になるなよ、……一人になったら死ぬと思え。」

リュウは真剣な表情で皆にそう語る。皆も首を縦に振り、リュウの言葉を胸に刻みこんだ。

「さあ出発だ。目的も場所は、まだまだ遠いぞ。」

「……おおー！！。」

……
決意を改めたリュウ達一同は、ジャングルの中へと入って行った。
……

続く

第25話（後書き）

続きます。話しが進まなくて、申し訳ない。

第26話（前書き）

気が向いたので書きました。

第26話

特殊金属・ツタンを求め、やって来たリュウ達一行はジャングルの中を進んでいる。

フランキー「暑いな、どこまで続くんだ？このジャングル。」

トム「列から離れるなフランキー。迷ったりしたら命はねえぞ。」

フランキー「うーっす」

トムに注意され、列に戻るフランキー。・・・現在リュウが先頭を歩き、その後ろにシグレ、テン、フランキー、トム、グルメネコの順で隊列を組んでいる。一番、戦闘力が高いリュウを先頭に置き、危険な最後尾には戦闘力が高く、不死身の肉体を持つグルメネコを置いた。何よりグルメネコは元が動物のため第六感が人間よりも遥かに優れているため、ある程度の危険は対処することができる。

『カサツ、ザ、カサカサ』

シグレ「・・・何か...いる。」

リュウ「気づいたか、シグレ。」

シグレ「・・・リュウ...気づいて...た？」

リュウ「ああ、始めからな。」

フランキー「何だ？、何かいるのか？」

リュウ「そこらじゅうにいる。・・・少なくとも30匹を超える獣がおれ達を襲おうと、常に張り付いている。」

フランキー・シグレ「！！？」

リュウの言葉で二人に緊張が走る。今まで何の問題もなく順調に進んでいたため、そんな事態に陥っていたとは思ってもいなかったのである。

フランキー「そ、それじゃ、何で襲ってこねえんだよ！？」

トム「リュウとグルメネコのおかげだ。」

フランキー「へっ？」

トムがリュウに変わって説明する。

トム「ジャングルに入ってからすぐにワシたちは獣たちに狙われていたが、リュウとグルメネコが絶えず獣たちを威嚇しているんだ。」

フランキー「威嚇？、そんなもん何時やってんだ？。」

リュウ「今もやってるぜ、・・・こんなふうに」

フランキー・シグレ「！！！！！！っ」

リュウが振り向くと、凄まじいまでの殺気がフランキーとシグレに襲いかかる。それを受けた二人はみるみる内に汗まみれとなった。

リュウ「獣のほとんどは、自分より強いものとはけして戦わない。回りをうろついているやつらは、おそらく寝込みを襲おうとしているのだろ。・・・まあそれまでにはジャングルを抜けられるさ。なあトム」

トム「ああ、もうだいぶん進んだからな。夕暮れ前には抜けられるぜ。」

着実と進むリュウたちであつた。・・・が、その時

リュウ「全員、ストップ！！」

一同「！！！！！！！！！！」

リュウが突然叫び、全員動きを止める。

テン「クピ？」

トム「どうしたんだ？リュウ。」

リュウ「…………正面から、何かがこちらに近づいてくる。」

一同「……………！！？」

リュウの一言で、一同に緊張が走る。そして向かってくるものの姿がだんだん見えてきた。

『ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！』

フランキー「なななな、何だありやつ！！？」

シグレ「……………イノ……シシ？」

迫ってきている物体の正体は体長30メートルを超す、イノシシであった。

イノシシ「んっ！！んっ！！んっ！！」

テン「クピ、クピ、クピプウ！」

フランキー「はしゃいでる場合じゃねえだろ、ハネチビ！！。早く逃げるぞっ！！」

リュウ「全員そのまま動くな！」

フランキー「!!?、何いってやがる!!。このままじゃ全員踏みつぶされちま「静かにしろ」、って?トムさん!?。」

トム「リュウの言つとおりにする。……心配は無用だ。」

フランキー「くっ!……わかったよ。」

トムに言われ、押し黙るフランキー。だが、それをよそにイノシシはどんどん近づいてくる。

イノシシ「んっ!!んっ!!んっ!!」

フランキー「くる、くる、くる、くる、きやがるぞぉ!!」

シグレ「……リュウ」

シグレは心配そうにリュウのことを見上げるが、リュウはそんなシグレの頭に手を置いた。

リュウ「心配するな、シグレ。……大丈夫だ。」

シグレ「……」『コク』

笑顔で返してくれたリュウを見て、シグレは静かにうなづく。そしてリュウは再び前を向く。もうすぐそこまで迫って来たイノシシにリュウは

リュウ「ふん！」『ギラッ！！』

イノシシ「！！！！？っ」『ギギーーーーーッ！！』

リュウはイノシシに向けて凄まじいまでの殺気を放ち、イノシシは目前でストップする。リュウの殺気を直に受けたイノシシは身震いをしだし、物凄い量の汗をかき出した。

イノシシ「ん、ん、ん、ん……」

リュウ「去れ……さもないければ……」

リュウが手を上げた瞬間

イノシシ「んんっ！！んんっ！！んんっ！！」『ダン、ダン、ダン、ダン、ダン』

イノシシは明後日の方向に逃げ出して行った。

フランキー「た、たすかった．．．」

シグレ「．．．何したの？」

リュウ「ん？、いや、ただイノシシに強めの殺気を当てただけだ．．．だが、妙だった。」

トム「何がだ？」

リュウ「あのイノシシ、目前まで俺の殺気に気づいていなかった．．．まるで何かから逃げていたような．．．ん！、全員気をつけろ！」

トム「どうしたリュウ．．．ん！？また何かくるぞ。」

一同「．．．！！！！」

再び緊張が走る。そして近づいてくる物体が薄っすらと見えてきた。

シグレ「．．．．．人？」

近づいてくる物体の正体は人間であった。格好から言って男性、その者はゆっくりとリュウ達のもとに近づいてくる。その男は丸腰であったが、リュウは男から発しているような威圧感を感じとった。

リュウ「気をつけるよみんな。．．．手ぶらだが、おそらくあの
大岩を真つ二つにした男だ。」

一同「「「「「！！！！！！」」」」」

全員が身震いをした。それもそうだろう、あの大岩を真つ二つにするようなんでもないことをしてしまう相手に恐れずにはいられない。この中で対抗できるものはリュウ一人。．．．そして男は、リュウ達の前で止まる。

男「．．．．．」

リュウ「．．．．．」

リュウと男はお互いにらみ合い、しばらくその状態がつづいた。
．．．．．すると男が

『バツ！』

リュウ「ん！？」

突然、男が眼の前でひざまずいた。そして男から言葉が発せられる。
．．．．．

男「……………力を貸してほしい。」

続く

第27話（前書き）

前回の続き

第27話

リュウ達の前に突然現れた、謎の男。不気味な威圧感を漂わせリュウと睨みあう。睨みあう二人の威圧感は凄まじく、回りに張り付いていた獣たちは逃げ、トム達も後ずさる。・・・しばらくその状態が続くと突然、男が跪き

男「力をかしてほしい。」

リュウ「・・・へ？」

全く予想していなかった言葉に、リュウは頭に？を浮かべる。そして男は、今度はリュウの腰に抱きついてきた。

男「頼む！、拙者と一緒に刀を取り戻してくれ！！」

リュウ「ななな、何だ！？何だ！？。訳がわからんが、とにかく離れろ！」

またしても予想外の行動をとる男にリュウは混乱する。

フランキー「何がどうなってるんだ？」

トム「ワシにもサッパリわからん」

テン「クプ、クプ」

グルメネコ「んゝんゝんゝんゝ（サツパリだ。）」

シグレ「……訳……わからない」

離れたところで見ていた他の連中も訳が分からなくなっていた。
さらに男は涙まで流し、鼻水をたらしていた。

男「お願いだゝ！！、拙者をたすけてくれゝゝ！！」

リュウ「いい加減にせんかあつ！！」 『バコッ！！』

『ドカーーーーーン！！！！』

リュウの拳が男の頭にクリーンヒット。男は上半身が綺麗に地面に埋まった。

シグレ「……痛そう……。」

フランキー「結局何なんだ、こいつは？」

リュウ「分からない。気配から言ってただ者ではないと思っていたが、全く予想だになかった行動をとってきたから、とりあえず気絶させた。」

トム「この島には人は住んねえはずだ。ましてやここはカームベルト……ただの人間がこれるような場所じゃねえ。……とりあえずジャングルを抜けよう、出口は近いはずだ。」

リュウ「そうだな。グルメネコ、こいつを運んでくれ。……こいつにはジャングルをぬけた後でゆっくり事情を聞きましょう。」

グルメネコ「ん~~~~（分かった。）」

謎の男をグルメネコに運ばせ、リュウ達はジャングルの出口に向かった。……

……ジャングルを抜けたリュウ達は溪谷入った。そして日が暮れてきたため、できるだけ安全な場所で野宿の準備にとりかかった。

リュウ「水を汲んできた。……あの男はどうしてる？」

トム「まだ意識は戻ってねえ。なんだか気疲れを起こしていた見てえだから、グッスリ寝てらあ。」

岩のくぼみに陣地を決めたリュウ達。グルメネコが食事の準備に取り掛かり、テンとシグレがそれを手伝う。そして男の介抱はトムとフランキーに任せていた。

男「ぐ．．．ぐぐ．．．うう．．．」

フランキー「お！？、おい、目が覚めたぞ！。」

トム「ん！？」

リュウ「そうか．．．」

全員が男のもとに集まって来た。

男「はっ！？．．．．．ここは？」

リュウ「気がついたようだな．．．．意識はハッキリしているか？」

男「ん？．．．．．ああ．．．．お主達は先程の．．．．」

リュウ「ああ、突然抱きつかれて訳が分からなかったから、とりあえず気絶させてしまったのだ。それでこのグルメネコにここまで運

んでもらった。」

男「ネコ？・・・これは失礼つかまつった。先程は気が動転としていたため失礼を働いてしまったようだ。・・・申し訳ない。」

グルメネコ「ん〜ん〜」

頭を下げる男に、グルメネコは木のプレートに《気にするな》と書いて返事を返す。

リュウ「さて、自己紹介をしておこう。俺の名はリュウ、りゅうじん流離人だ。そしてこちらにいるのは、右からトム、フランキー、テン、シグレ、そしてさっきも言ったがグルメネコだ。」

トム「たっはっ！...！！...、よろしくな。」

フランキー「オレ様がフランキーだ、おぼえておきな。」

テン「クツピ、クピプウー」

シグレ「・・・よろしく。」

グルメネコ「ん〜ん〜（改めてよろしく）」

男「これは親切に・・・それではこちらにも名乗ろう。」

男は姿勢を正し、正座をした。そして名前を名乗る。・・・

続く

男「拙者は、ゴエモン。……イシカワ・ゴエモンと申す。」

第27話（後書き）

あまり深くは考えないように・・・

第28話（前書き）

前回の続き

第28話

ツタンを求めやって来たリュウ達の前に、突如現れた謎の男。現れるやいなや突然跪き、あろうことか泣きながらリュウに抱きつき助けを求めた来た。訳がわからないリュウは、気が動転している男を気絶させ、ジャングルを抜けて、介抱した。そして目をさました男に事情を聞くため、全員が名を名乗り、男もそれを返すように名を名乗る。

男「拙者はゴエモン、・・・イシカワ　ゴエモンと申す。」

トム「イシカワ・ゴエモン？・・・どっかで聞いたことのある名前だな。」

リュウ「その名は知っている。」

一同「・・・！？」
「」
「」

リュウの一言で皆が顔を向ける。

リュウ「イシカワ・ゴエモン・・・グランドラインの新世界にあるワノ国で名を入れた剣豪の名前だ。その腕はグランドラインでも右に出る者はいないとまで言われている。」

ゴエモン「拙者を知っておったのか？」

リュウ「名前だけはな。そしてもう一つ……お前が扱っている刀も有名だ。」

シグレ「……刀？」

刀と聞いて、シグレが反応する。同じ刀を使う者として純粋に興味を持ったようである。

リュウ「イシカワ・ゴエモンが使う刀は「斬鉄剣」……最上大業物１２工の一つで、あらゆる物を切り裂くと言われている……聞いた話では、海を切り裂き、イナズマをも立ち切った……とまで言われている。」

フランキー「おいおいおい、何だ！そのとんでもねえ話は！」

あまりに突拍子もない話しにフランキーが騒ぎ出した。
 ・ ・ ・ ・ ・
 そこでテンが

『テン、クピーー!』

フランキー「ぎゃあああああ！！！！」

何故か、フランキーに電撃を浴びせた。

リュウ「何をやってるんだ？お前は」

テン「クピクピ、クピピプウ」

リュウ「何？、イナズマなら起こせるって？・・・自慢したいのは分かるが、お前の電撃は強力なんだからヘタに人に放つな。ほらを見てみる！」

テン「クピ？」

振り向くとそこには、黒コゲとなり気絶するフランキーの姿があった。

リュウ「何も考えずに行動すると、あんな結果になってしまう。ちゃんと介抱してやれよ。」

テン「クピプウ」

手を上げて返事をするテンは、フランキーの介抱をした。

トム「話を戻すが、おめえさんがすげえ剣客ってのはわかったが、そんなおめえが何故この島にいるんだ？。ここはカームベルトの中にある島だ、ただの人間がこれるようなところじゃねえぞ。」

ゴエモン「それについては深い訳がある、説明しよう・・・。」

回想・二月前

グランドラインの前半の海にある、冬島。ここに凍りついた大きな滝があり、その滝の前にはゴエモンの姿があった。

ゴエモン「はぁ~~~~~」

大きく息を吐き、精神を集中させる・・・・・・そして

ゴエモン「とうえー……いつ……!!」

『ドスッ!!』

凍りついた滝にチョップを繰り返した。．．．すると

「ドゴッ! !」

凍りついた滝が砕け、まるで氷山のような氷の塊がゴエモンの頭上目掛けて落ちて来た。だがゴエモンは斬鉄剣を取り、それを

ゴエモン「とああっ！！！」『ザシュツ！ザシュザシュツ！ズバツ！！』

凄まじいスピードで氷を切り裂いていく…………そして

『パラパラパラパラ……』

巨大な氷の塊は綺麗に千六本にされていた。

ゴエモン「ふ、つまらぬものを切ってしまった……………」『フウッ！』

ゴエモンは斬鉄剣を宙に投げ、鞘をかざす。そして宙に舞った斬鉄剣が鞘に収まろうとその瞬間

『ビューーーーーンッ！！』

ゴエモン「ぬうあっ！？」

突然何かが頭上を通り、ゴエモンは仰け反る。そして態勢を元に戻すと、そこに斬鉄剣はなかった。

ゴエモン「!!!?、無い!、斬鉄剣が無いっ!!」

突如消えてしまった斬鉄剣。ゴエモンは辺りを見回し、ふと後ろの空を見上げると

カラス「カー、カー、カー……」

大きなカラスが飛んでいて、その足には斬鉄剣が掴まれていた。

ゴエモン「そ、それは其れがしの斬鉄剣!!、ま、まてえーっ
っ!!!」

ゴエモンはカラスを追い掛けて行った。……大地を駆け、海を泳ぎ、追いかけて追いかけて追いかけてまくって行った。……

く現在く

ゴエモン「そして気がついたら、この島までやってきていたのだ。」

トム「……………この島まで、泳いできたってのか!？」

シグレ「……………すう…い」

リュウ「たしかにすごいと言えはすごいが、……………あきれたものだ。」

グルメネコ「ん〜（こいつアホだ）」

凄まじいまでの執念とバイタリティにリュウは少し呆れ、グルメネコは木のプレートにアホと書いていた。

ゴエモン「何とか斬鉄剣は取り戻したが、ここがどこなのかも分からず、島を出ようにも出られずにいたのだ。」

リュウ「なるほど、お前がこの島にいる理由は分かった。……………だが、さっきの行動とは結びつかないぞ。」

トム「そう言やおめえ、力をかしてほしいとか助けてくれとか言うてやがったが、どう言うことだ?。」

ゴエモン「それは……」『バツ』

ゴエモンは突然何かを差し出した。……それは

シグレ「…………鞘。」

ゴエモン「如何にも、これは斬鉄剣の鞘だ。」

リュウ「剣を収めていないが、斬鉄剣はどうした？」

ゴエモン「んっ……………」

そう言われると、ゴエモンは口ごもってしまった。様子のおかしいゴエモンに一同が見守っているとゴエモンの口が開いた。……

ゴエモン「……………食べられた。」

続く

第29話（前書き）

前回の続き

第29話

ゴエモン「……………食べられた。」

一同「……………へっ?」「」「」

ゴエモンのから発せられた言葉に一同の頭に?が浮かぶ。

リュウ「食べられた?……………どういう意味だ」

ゴエモン「そのままの意味だ。……………この先をしばらく行った所にある洞窟の中にいた巨大な金属のへびに丸飲みされてしまったのだ。」

トム「!!!?、まさかメタルオロチかつ!?」

話を聞いていたトムが身を乗り出した。

ゴエモン「あのへびを知っておるのか!?」

トム「ああ。この島にいる金属のへびといやあメタルオロチしか考えられねえ。」

リュウ「そのメタルオロチに「斬鉄剣」を食べられたというのか。……………つまり、力を貸してくれというのは、「斬鉄剣」を一緒に取

り戻してくれ・・・と、いうことか。」

ゴエモン「誠に情けない話だが、そのとおりだ。」

リュウ「しかし、お前ほどの使い手が遅れをとるほど強かったのか？、メタルオロチは。」

リュウは疑問を抱いていた。「斬鉄剣」はあらゆるものを切り裂くとまで言われた名刀。それにゴエモンほどの腕を持てば、まず遅れをとることはないはず

ゴエモン「そうではござらん。ただ・・・切れなかったのだ」

リュウ「何！？」

ゴエモン「拙者の・・・拙者の心・技・体の全てを注いで放った刀で奴を切ることができなかったのだ！！」『ドスッ！！』

ゴエモンは地面を殴る。

リュウ「斬鉄剣で切ることが出来なかっただと！。一体・・・」

ゴエモン「斬鉄剣は拙者の命と同じ、・・・この手に取り返さなければ死んでも死にきれん！！。故にそなた達の力を借りたいのだ！。頼むっ！、拙者に力を貸してくれっ！！」

ゴエモンは再びひざまずき、頭を下げる。するとトムから言葉が発せられた。

トム「……………いいぞ。」

ゴエモン「!?、まことかつ!?」

リュウ「トム……………いいのか?」

トム「ここで会ったのも何かの縁だ。それに俺達の目的のツタンも洞窟の中にある事だし、仲間は多いに越してことはねえ。」

リュウ「そうか、……………分かった。そう言うことだ、グルメネコ、シグレ。」

グルメネコ「ん~~~~（了解した）」

シグレ「……………わかつ…た」

グルメネコとシグレも了承した。

ゴエモン「かたじけない!!。」

ゴエモンは涙を流しながら、礼をのべた。一人ずつ手を握り礼を言うがシグレの手を握った時に、シグレが背負っていた刀に止まっ

た。

ゴエモン「!？、それはシズナの「あかはねおにがわら赤羽鬼我羽羅」!。何故そなたがそれを持っている!？。」

シグレ「!？、・・・父を...知ってるの？」

ゴエモン「父？、まさかそなたは」

リュウ「その子はシズナの娘だ。」

そこにリュウが割って入る。

ゴエモン「まことか!？。あ奴、娘をもうけていたのか・・・。」

リュウ「お前シズナを知っているのか？」

ゴエモン「ああ、シズナとは何度も刀を交えたことがある。・・・
ライバル良き宿敵であったが、十数年前から突然行方をくらましてしまっ
てな・・・この子がシズナの娘だとするとシズナは何処に？」

シグレ「・・・それは……。」

シグレは口ごもってしまった。父親であつたシズナを思い出すのは心苦しいものがあつた。すると、それを悟つたリュウがシグレの頭に手を置く。

シグレ「・・・リュウ……」

リュウ「無理をしなくていい、俺が説明しよう。」

リュウはシズナについて語り出した。

ゴエモン「・・・そうか、シズナは亡^いったか。・・・惜しい男を亡くしてしまったな。」

ゴエモンは目をつむり黙とうを捧げる。するとシグレが話しかけて来た。

ゴエモン「？、なんだ？」

シグレ「・・・あなた…父の…友達？」

ゴエモン「……奴は良き宿敵であり、良き友でもあった。」

ゴエモンは笑顔で語り出した。それを見たシグレは笑顔になり、ゴエモンに手を差し出す。

シグレ「……父の……友達でいてくれて……ありがとう。」

ゴエモン「……さすがシズナの子供だ。どういたしまして。」

ゴエモンも笑顔で手を取り握手を交わした。

トム「話はまとまったみてえだな。」

リュウ「ああ。さて、日も暮れたしメシにするか。グルメネコ、準備を頼むぞ。」

グルメネコ「ん~~~~」

リュウ「さーて皆、メシにするぞ。明日は大変だからな。」

一同「~~~~おお~~~~！」

こうしてリュウ達の夜は過ぎて行った。……………

続
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7729n/>

ONE PIECE ワンピース ~流れる者~

2011年10月7日23時06分発行